
闇の力ってナニ？

ドイツの狛犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の力ってナニ？

【Nコード】

N08490

【作者名】

ドイツの狛犬

【あらすじ】

変わった師匠から「同年代と交じり合い、更なる高みを目指せ」と言われ、山から降り、龍牙魔術学園に転入してきた鬼崎炎魔。社会革命がまだ浅いため、学園内に差別が行われている。炎魔は何と男子寮が満タンなため、女子寮に住むことに……。そして偶然に「男殺しの優」と異名とる土方優の全裸を目撃してしまいボコボコにやられてしまう。次の日には女子には避けられ、男子には皮肉を言われる羽目に。さらに前任を蹴落とし、生徒会長に上り詰めた、雷神アテネに「おもしろい」という理由に無理やり生

徒会に入れられる。気まずいことに生徒会には土方優が風紀員として君臨していた。それに追い討ちを駆けるかのように謎の裏組織が炎魔の中に眠ると言われる。破壊龍、を狙う。

このドタバタラブコメがありそうでないストーリー、読んで笑ってやって下せえ。

龍牙魔術学園

第一章

プロローグ

広い敷地には数多な花で埋め尽くされていた。全ての花は鮮やかに咲き、一緒の季節に咲くはずもない物まであった。その花畑の真ん中には異様な形の城が建っていた。それはまるでたくさんのキノコが光を求めて一つの根っこから育った風に塔が建っており、周りの花とは違った異様さを放っていた。そこに突如、一人の少年が現れた。ポロポロの布を纏いながら重い足取りで花畑を素通りし、城に向かっていた。彼は城門を潜り抜け、城内へと足を踏み入れたがそこは真つ暗だった。少年は足を止めたが、低く唸ったかと思えば迷わず闇の中へと歩いていった。

龍牙魔術学園はジパング首都の江戸の唯一の魔術専門学校、全国でも若いエリートの大魔術師たちが通う名門学校だった。本来、貴族にしか入れなかったが、50年前の社会革命以来、一般人も入学可能となった。校舎は東西南北に分かれており、それぞれの役割を持っている、そしてかなり広く、多くの設備が整っているため、学園都市とも呼ばれることもある。ただ買物ができないくらいである。東区は体育館、武道館、いわゆる体育系の事が行われる所である、反対の西区は科学設備、マキナ設計場、調査室、医療室がある。南区は校門にあり、生徒の授業や、職員室、学園長室がある巨大な四角の校舎が建っている。そして北区にも校舎があり、他の区では行えない部活室があるが、あまり使われていないため、物置と化している、ちなみに、生徒会室はそのとなりにあるゴージャスな塔にある。

鬼崎炎魔はその南区の学園長室の前で深呼吸を何度も繰り返し、その扉の向こうに待ち受けている物に対し覚悟を決めていた。

師匠に龍牙魔術学園に入学するはずが、戸籍が無い為、いろいろな役職がらみの事をしなければいけなかったため、入学のつもりが転入と言う形になってしまった。そして、どうという風の吹き回しか、学園長自らが彼に説明やら学園に必要な事を教えてくれるらしい。炎魔はツンツンしている自分の白髪を整えるのを諦め、覚悟を決めて頑丈なドアをノックした。

中から低く「入れ」とくぐもり、炎魔はドアを開け、学園長室に足を踏み入れた。学園長室は殺風景な部屋でこれと別に目立ったものは無かった。一つの壁には色んな勲章がかざっており、部屋の奥の窓からの光がデスクを照らしている。部屋の真ん中には来客用のソファーと学園長用のアームチェアが並んでおり、その肘掛け椅子の前に龍牙魔術学園37代目学園長、松平龍一郎が立っていた。

「うむ、君が鬼崎炎魔君か、ようこそ龍牙魔術学園へ。驚の名は松平龍一郎、この学園の長を勤めている。」威厳のある低い声で学園長が挨拶してきた。その威厳さを裏付けるように、学園長の背は高く、天井に届くくらいだった。それと同時にゴツイ体つきでまるで巨人が立っている雰囲気だった。髪と髭を長く伸ばし、これもまたカリスマを高めた。

「どうも、鬼崎炎魔です。これからお世話になります。」炎魔は自己紹介して、ペコリと頭を下げた。

「まさか今時山に籠って、一人の師匠の下で修行をしている輩がいると聞いて、驚いたぞ。」フォツフォオと笑いながら学園長が笑いかけてくる。「しかし、君は何故、師匠の元を離れ、この学園に転校してきたのかね？」

「俺の師匠が、同世代と交じり合い、経験を積み、さらなる高みを目指せ、って仰るので、俺をこの学園に入れくれました。」炎魔は答えた。

「ふむ、たしかに、」学園長はうんうんと頷く。「人間は一人では生きてはいけない生き物だ。人と人との関係で？がりを作り、それを大事にし、人間は強くなる。君は実にいい師匠を持ったようだの。」

「炎魔は「ども」と言った。

「では、本題に移ろうかの。」松平学園長の眼差しが厳しくなった。
「新学期は4月なんじゃが、君は山籠りしていたから、特別に驚が
新人を許可する。君の師匠は律義にも驚に紹介と挨拶の手紙を送っ
てきた。全く、彼とは一度は会ってみたいものじゃ。」

「ま、そのうち連れて来ますよ。」

「うむ、期待しておこう。しかし、君も随分変わっておるのう。白
髪に紅い眼なんて組み合わせは滅多にあるものではない。それに手
紙によれば、君は常識離れした力を持つているとのことだが・・・
実際はどうなのかね？」

「ま、常識離れしているのは合ってますが、強いというわけ
はありません、」鬼崎は説明する、「ただ滅多にない力つてこと
です。」

「その力とは？」松平は子供みたいに興味津々に尋ねる。

「ぶつちやけ言えば闇の力です。」炎魔は何事でもないようにあつ
さり答えた。

しばしの間、沈黙が部屋を包んだ。

「闇の力？」学園長は首を右に傾げた。

「闇の力」炎魔は向いのオジサンに合わせて首を傾げた。

「闇の力とは？」松平は今度は左に傾げた。

「闇の力と言えば闇の力だ。」炎魔はまたしても同じ方向に首を傾
げた。

「なるほど、闇の力かの。」首をまた真つ直ぐにして炎魔に笑いか
けた。

「そう、闇の力、それ以上でもそれ以下でもない。」炎魔は爽やか
に笑い返した。

二人はお茶を啜り、またテーブルの上に置き、ホツと一息付いた。

「判るわけあるかあああああああ！！！！」「ぎゃああああ！！

！！！！」

松平の質問を今のやり取りで誤魔化そうとした炎魔は、部屋が狭い

にもかかわらず、学園長に地獄車を掛けられてしまっていた。

龍牙魔術学園（後書き）

ドイツでこんなしょうもないモン書いてんじゃねーと言われるオチはもう見えてますが、どうか何か訂正、アドバイスとかあれば送ってください、お願いします。

地獄と天国は紙一重

「さて、話に戻ろう。」松平は咳払いした。「闇の力とは何かね？」
「すいません、それは俺も良くわかんないんす」炎魔は先ほどの大技で完全にボロボロになり、誤った。

「わからん？」松平はまた立つ。

「マジですから、ただ暗闇関係の魔法としかぐらいわからないんす。
」鬼崎は涙目で必死に弁解する。「たとえば自分の影の中に隠れるとか、夜の暗闇の中で身体能力がアップするとかそういうのです。」

「ふむ、」松平は考え込みながらソファーに腰掛ける。「たしかに我々魔術師が使う魔術とは違うようだな。しかし、体内のマナを操り、駆使しているのだろうか？」

「はい、そうです。基本は同じです。」
「なるほど、ではちゃんと授業を受けることはできるな。もし、違っていたらこちら側も困り果てた所だ。」

炎魔その言葉にホツとした。実は闇の力のせいで転入を拒否される不安がいつぱいでたまらなかつた。

「さて、問題は片付いた所で少し君に話がある。」松平は語る。

「この古くからある龍牙魔術学園は名前のとおり、若い魔術師のための学校である。魔術が使えない凡人は公務員の爺さんぐらいじゃ50年前の社会革命の前は貴族だけの学校じゃったが、それ以来は一般の人も入れるようになっておる。じゃがこの時勢にも元貴族出身のもの多数おるため、学内では元貴族と一般人の小競り合いが耐えん。そのため、喧嘩はこの学園の名物と言っても過言ではないだろう。じゃが、魔術師がぶつかり合えば魔術で怪我人が出る、じゃから校内では魔術の私用は禁止されておる。唯一、壁魔法と治癒魔法は例外にされておる。とは言っても時代遅れにも肉弾戦はあるから気をつけてもらおう。」

「喧嘩には多少つよいんで心配せんで下さい。」炎魔は自身たっぷりと言う。さすがに山籠りをしていただけはある為、身体能力はそこらに人には負けなかった。

「うむ、まあ君なら大丈夫じゃろう。では、」松平学園長はソファの後ろに置いてあったトランクを取り、テーブルの上に置いた。

「このトランクの中には制服や、教科書、学校で必要な物が入っておる。普通なら新しいのを買ってもらうが君の場合は元生徒が寄付した、いわばお古を使ってもらう。」松平は説明した。

そしてトランクを開け、中に入っているものを次々に出し、並べ始めた。制服はグレーの気品がある学生服とズボンをそれぞれ三着ずつあった、制服は少々軍人くさいと炎魔は思ったが別に気にはしなかった。その隣に教科書が一覧、少々ボロボロで表紙には落書きで満喫だった。

そして最後に液晶プレートが差し出された。

「何ですかい、こりゃ？」炎魔はプレートを持ち、不思議そうに眺めながら学園長に尋ねた。

「これはのう、生徒手帳じゃ。」松平は誇らしげに言った。「それで身分証明書になり、電話にもなり、他にも色々出来る大した生徒手帳じゃ。しかもそれは機械技術と魔術を融合させた魔機械^{マキナ}で立体映像も映し出せるし、魔術師自身のマナでしか作動しない優れたものじゃ。」

「ほう、それはまたまた見事なモンで……。」

「うむ、ちゃんと全部入っておるな。」

確かめたかっただけですかい、と炎魔は内心、突っ込んだ。

「さて……。」ここで威嚇であふれていた学園長が少し歯がゆい、険しい顔をした。「実は君に話し辛い問題が発生した。」

「聞きたくありませんがどうぞ。」

「実は、男子寮が満タンで君のために一部屋も空いていないのじゃ。」

「と歯切れ悪そうに松平は言った。」

「マジですか？」炎魔は寮生活の楽しみが粉碎してしまい、がっか

りした声で言う。「じゃ何処で寝ろっつーんですかい、店長？」

「驚は学園長じゃ。まあ、でもその代わりに他の寮で良ければその寮の一部屋で過ごしてもらうことが出来る。」

他の寮？たしか男子寮は満タンで一部屋も空いていないと学園長が言っていたにも関わらず、他の寮？問題解決では………

「まさか………」炎魔の思考は一つの答えを出してしまい
驚愕していた。

「そのまさかじゃ。」松平は申し訳なさそうな顔で誤った。

「あの男が入ったら生きては出られないと噂される恐ろしい女子寮で寝ると………」と炎魔。

「そうじゃ。」と松平は重々しく息を吐いた。

しばしの間沈黙がその部屋を支配した。

女の子の全裸の代償は高い！！

龍牙魔術学園りゅうがまじゅつがくえん、女子寮。一年程前まで何処にでもある普通の女子寮。ここでは女の子だけが住み、寮母の指示に従い料理を作り、毎朝そこから学園へ向うというありふれた女子寮である。基本的にはそれは変わっていない、ただそこに住んでいる女子が問題である。人間百人いれば性格も百等にあるという事は当たり前。それは何に置いても同じである。

問題は全国で、しかも田舎で時間を大半修行に費やしていた炎魔でさえ龍牙魔術学園の女子は恐ろしいと言う噂を聞いたことがあるほど、とんでもない女子が数人いる。

それはまだ男女差別が根強く残っているせいで、女らしくない行動をするとマスコミで取り上げられる。炎魔も当初、マスコミがささやかな事を自分達的に解釈し、そしてその話に尾ひれが付いて炎魔の耳に届いたものだと思っていた。

だが龍牙魔術学園に転入の手続きの際、役所の人が炎魔の手を握り締め、涙目で考え直すように言ってきた。例えマスコミでもここまですべて情報操作は出来まい。

炎魔は師匠の薦めた学校に疑問を感じ、役所で断った際、お守りをおくれたので一層不安なってしまった。

それで今はその恐ろしい噂の出現源である女子寮で寝る事が決まってしまった。

.....決まってしまった。

「マジっすか？」炎魔はもう魂が口元から出かかっている程、落ち込んだ状態で改めて聞いた、学園長の冗談だと強く念じながら。

「残念ながら本当じゃ、」松平は悲しそうな表情で言った。「短い付き合いじゃったのう。」

「いや、俺まだ死んでねーし。」炎魔は突っ込む。

「というわけで君は女子寮で住んでもらう事にした。」松平は前の

やり取りが無かったかのように話を改めた。

「もちろんこれも驚の一存で例外扱い、じゃが君の行動は寮内ではかなり制限させてもらう。」

まあ、当たり前だろうな。っていうかよく学園長の一存で決まったな、と炎魔は思った。

「まあ、簡単に纏めれば覗くな、触るな、虐めるな、責めるな、戦うなの五つじゃ。」松平は指を立てながら数え上げた。

「結構常識的ですね。」炎魔は感想を述べる。

「そうじゃ、」松平は同意する。「君が生き残りたければこの五つのルールを守れ。」

「あれ？俺の心配？俺がケダモノと化する心配はないんすか？」炎魔は突っ込む。

「無論、無い。」学園長は胸を張って自信たっぷりに言い放った。

というわけで鬼崎炎魔、16歳。龍牙魔術学園女子寮に住むことになった。

松平学園長との話を終えたあと、寮母の林はやし花子はなこに迎えられ、女子寮へと案内された。寮母の林さんは何処にでもいるような胸ペツタンコのおばさんだ。眼鏡と後ろで団子に結びあげた茶髪で厳しい表情をした女性だった。女子寮は学園から徒歩十五分といった距離で住宅街を通りぬければ殆んどすぐだった。

女子寮は住宅街の家々を越えた四角マンションで別に変わってはいなかった。

「ここが龍牙学園、女子寮、通称『龍女』(りゅうじょう)です。」

林さんは敬語なのに合わないローテンションな声で紹介した。

「意外と地味ですね。」炎魔は言う。

「松平学園長は派手なものがお嫌いなので。鬼崎さんの部屋はこちらになります。」

炎魔は林さんに案内され、最上階である十階へと階段を上り、13、鬼崎炎魔とプレートが垂れ下がっているドアにたどり着い

女の子の噂話は陰湿のが多いし、早く広がる

「随分と手酷くやられましたね、鬼崎さん。」林さんはゲルに包まれた炎魔に言う。

「他人事みたいに言ってるじゃねえ。」炎魔は抑え殺した怒りで満ちた声で文句を言う。

炎魔はバズーカで撃たれた後、全身火傷を負い、向かいの壁に壁画同然に埋まっていた。少女は赤くなりながらタオルを巻いて隣の部屋へと逃げ込んだ。

林さんは炎魔の状況をじっくりカメラで撮り、彼の白髪を引つ張って壁から抜き出し、悲鳴を上げているのも関わらず部屋へズルズル引きずりハンモックの上に乗せた。そしてエプロンから黄色く薄い玉を取り出し炎魔の鼻の押し付けた。すると玉は溶け、体表面に広がり、ゲルとなって包み込んだ。

「ま、その癒しジェル、包まれていれば明後日には直りますよ。」林さんは炎魔のコメントを無視してそう告げた。

「こんな、一日で直る。」炎魔は歯軋りに言う。「というか何で俺の部屋にあんな女の子の形をした化物いんだよ?!」

「彼女のシャワーは壊れていて、私がこの部屋のシャワーを使うのを許可したからです。」

「ひよっとしてこんなことが起きることを期待していたのか?」炎魔は口元を引きつらせながら聞いた。

「はい、そうで・・・滅相ありません。」

「いや、今、はい、そうです、って言いかけたよな?!」

「ちなみにさっきの娘は土方優ひじかた ゆう、一年であなたと同じ年です。」寮母は説明する。

「聞いてねーよ!! 大体何でハンモック?!」

「前に住んでいた女子がベッドを壊してしまいまして、何も無いよ
りハンモックでも置いとこうかと・・・」

「ベッドを壊したんだ、壊れたんじゃなくて。ある意味すげーな。」
「まあとにかく、私は厨房に行かないといけませんのでここで失礼させていただきます。明日、朝食は七時から、そして八時半に職員室で土方先生を呼び出してもらいなさい、以上。」
そう言つと林さんはさっさと部屋から出て行つてしまった。

次の日の朝。

炎魔は昨晚、夕食にありつく事が出来なかった。癒しジェルは怪我人再生力を以上にまで早めることが出来るが、その代わりに体の自由を奪う。そんなわけで悲惨な目にあつた上、飯抜きにされた炎魔のご機嫌が斜めなのは無理も無かつた。彼は制服を着て、昨日紹介してもらつた食堂へと出向いた。女子寮だけで在つて、女の子にしか出くわさなかつたというか炎魔以外の異性がいたらいたで大騒ぎになる。

女子は全員、龍牙魔術学園の紅いセーラー服を着ており、古い形の制服でも時代遅れの雰囲気は全く無かつた。

食堂は広く、長い机に椅子が並び、質素な雰囲気を漂わせた。がしかしその雰囲気も炎魔が食堂に足を踏み入れたとたん消え去つた。しばしの沈黙が訪れた後、その場はヒソヒソ話でいっぱいになった。時には炎魔に指を指すものがいれば真ん中指を見せる者もいた。だがそれよりも女子の視線が異様なほどに禍々しいものがあった。

ヒソヒソ話しがあまりにも多く、炎魔には彼女らが何を話しているのかは判らなかつたが自分の事であることは疑いようも無かつた。彼は嫌な目をしている当番の娘から食事プレートを受け取り、一番奥の人氣が薄い席に着いた。ちなみに朝食は味噌汁にご飯に本来なら魚なのだろうが、今は煮干が二個置いてあるだけだった。腹ペコでこんなに酷い扱いで機嫌が直る人間は少なからう、が事を荒立てれば面倒なことになると思つたため炎魔は黙つて食べた。

「ほう、本当に直つていますね。」後ろから声をかけられる。

振り向くと寮母の林さんが立っていた。

「今日はまだ火傷に苦しんでると思って新しい『癒しジェル球』を持ってきたけど無駄のようでしたね。」

「ま、でもこんだけ殺意が漂ってればまだ俺に使うチャンスはあるんじゃないんすか？」炎魔は不機嫌に言う。「まだ一日しか立っていないのに何すか、コレ？」

「ああ、これはですね。私が昨日の爆発の件で質問攻めに合っちゃってね、君が土方優さんのシャワーシーンをケダモノのように覗いて君の鼻血がああ爆発を引き起こしたと言ったら皆さん顔を悪くされて緊張していましたね。」寮母は手をポンと打ちながら説明した。

「おいおいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！フザケンナ！！！！何嘘を教えてんだあああああ？！！？！！？も合ってるねーじゃねーか！！！！そんな嘘教えりゃ誰だって俺に敵意を抱くだろうよ！！！！つーか何でそんな陰湿な嫌がらせをするんだ？！俺に恨みでもあんのか？」炎魔は大きな、爆発的な声で怒鳴った。バズーカで撃たれて、変態ケダモノ扱いになる羽目になった炎魔の憎悪の炎は激しく燃え上がった。

「実は私、男性が嫌いにしてここの可愛いお嬢さん方が騙される前に釘でも刺しておこうと思ってるので。」林さんにはにっこりと炎魔に笑いかけた。

しばらくの間、炎魔は林さんを睨みつけていた。彼の影が波立ち、眼も猫のように細長くなった。が何もせずに席を立ち、食堂を去っていった。

追いかけられるって意外と怖い！

炎魔は湯気を立たせながら学園へと向った。本来ならあの寮母を一発殴っているところだが、そんなことをしても何にもならなかったし、第一、初日で騒ぎを起こすのはまずいという考えが動いたからだ。が所詮、血の気の多い思春期。むかつ腹が立たない分けなかった。

「同年代と過ごし、経験を積む」という師匠の課題がこんなに難しいとは炎魔は想像もしてなかった。今、女子は彼を誤解をして避けているため、弁解の余地がない上に信じてもらえそうにも無かった。「おい、そのクソガキ、ちょっと止まれ。」炎魔の背後から声がかかった。

炎魔は呼び止める声を無視する。

そうしたら複数の足音が聞こえ、彼を追い越し、前に立った。5人の女子が炎魔の前に立ち憚る。

「何無視してんのよ?!」真ん中の背の高いリーダーらしき女子が突っかかる。

「駄目か?」炎魔は真面目に聞く。

「当たり前でしょ!先輩に声をかけられたらすぐに応じるのが常識的でしょ!」

「初対面に、クソガキ」という奴らに常識を語られたくねーよ。」

「うるさい、この変態が!私たちの可愛い後輩を汚して、そしてあろうことか林様に大声で怒鳴りちらすお前は最低だ!」そう罵倒しているリーダーに残りの四人が、そうよそうよ、と加勢する。

炎魔は大きいため息をついた。

「だからどうした?」

「は?」五人組は少し、あつげとられる。

「だからどうしたと聞いている。」炎魔はおとなしい口調だが何故か脅迫的なものがあった。

た。が炎魔に向けられている殺気はそのままなので炎魔は止まるはずも無く、しかも振り向いたら前髪に隠れて額に青筋が立っているために、怒り顔よりさらに不気味だった。

「おい貴様、さっきよりさらに早くなつてないか?! って言うか止まれ!!!」優もさらにスピードを上げる。

「げっ?! 何て早いんだ?!」炎魔は自分の逃げ足には自信あるものの、どンドン距離を詰められて行き悔しがる。そしたらいきなり巧妙、とは言い違いが、思いついた。

炎魔はストップした。足に負担がかかるのを感じたが30センチ前へ滑り、完全に止まり、その場で振り向いた。だが優は炎魔の思いがけない行動にビックリしてしまい、走りを止めなかった。その上炎魔より早い速度で走っていたため、猛スピードで彼に向って走っていた。

炎魔は右へよけて衝突を避けようとした。残念なことに土方も同じ事を考えていて彼を避けようとしたら、避けた方向にその本人が動いてしまった。

二人は案の定ぶつかり、すごい状態で絡まり、そのまま学園の校舎の外壁にガツツンとぶつかった。

最終的には炎魔が頭をぶつけ、土方優は彼の上に乗っている状態にあった(炎魔は にいることになる)。絡まって転がった以上仕方が無いのだが炎魔の腕は無意識に自己防衛の構え、つまり腕をxに重ね、掌が外を向いていた。

炎魔の掌には柔らかい感触が伝わった。なんと両手で優の胸をつかんでいるのだった!!!

こんな展開では飽き足らず、壁にぶつかった勢いで炎魔と優の顔が接近しすぎ、唇まで重なってしまった!!! 二言で言えばキスをしていた。

二人は自分らの状況をすぐに理解することが出来ず、数秒間そのままだった。

「この……」優が先に麻痺状態から溶け、顔は真っ赤にな

り、頭を後ろに上げた。「ドドへんたいがあああああああああ！！！！」と叫び、炎魔に渾身の頭突きを食らわせた。炎魔の麻痺も溶け、避けようと思ったが一足と言うより人頭遅かった。ちょうど壁から頭を上げた所に頭突きが入り、転がってきた勢いよりも強くコンクリート壁が凹むほどのダメージを受け、気絶してしまった。

女の子のスカート捲ってもそこにパンツがあるとは限らない！！

「離せ、エンジェルダスト！！！」

「そういうわけには行きません、土方さん。」

失神からゆっくり意識を取り戻していく炎魔の前ではどうやら喧嘩になっっているらしい。

後ろ頭を硬い壁に当てられ、そして見事な頭突きを額に頂戴した炎魔の視界はまだぼやけており、目の前の状況がよく分からずじまいだった。

唯一、見えるのは土方優と思われる人型の何かとその振り上げた両手の手首を縛っている光るナニカだ。そして、もがく彼女の両手の先にはでかいフライパンみたいな物があった。

「意識がない相手を打ちのめすのはあまりにも卑劣じゃありませんか？今まで正々堂々と武器を振ってこられた貴女にはふさわしくない。」おそらくこの白いナニカを操っている人は土方優を止めているのだろう。その声は波立ってない水面以上に落ち着いた音だった。

「でもこいつは私の大切な物を奪ったんだぞ！！」それに引き換え優は泣きそうな声でその人に訴える。

「それは見ました、というか見えてしまいました。でもそれは事故の過程で奪われてしまった物です。彼だってそんなつもりは無かったです。」

「でも、でも。」優はもう泣き出す寸前だった。

「なあ、おい。」炎魔の視界はまだぼやけていたが壁を頼りに立った。

そしてまた地面に倒れ、土下座をした。

「すまない、昨日に立て続け今日もお前の聖域を土足で踏み荒らしちゃった。恐らく、どんなに誤っても償いきれねえ、だから俺を煮るなり、焼くなり、好きにしろ。」

例え、山籠りが長かろうと人の大切な物を奪い、平気でいられる程炎魔の神経は凶太くなかった。特に世間に泣き顔をさらしそうになるほどの価値があると分かった以上なおさらだ。

「だそうです、どうします土方さん？」と落ち着いた声が響いた。しばらくの間、沈黙が流れた。

そして「いつぱつだけ」と呟くとそのフライパンらしきものが炎魔の背中に叩きつけられた。

息がつまり、痛みと衝撃が全身に伝わった。こみ上げてくる吐き気を押さえ込み、炎魔は土下座を開放して地面に座り込んだ。

そしてようやく視界が元に戻り、周りが見えてきた。

目の前には土方優が立っていた。顔は真っ赤だったが真剣な表情を浮かべていた。そして炎魔はここでやっと彼女が持っているものが認識出来た。

それはドデカイハンマーだった。

コレが頭にクリーンヒット決まったら飛竜でさえ殺せそうな大きさだった。何故、彼女がそんな物を持っているのか、そして何故それを軽々と触れるのか白髪の少年はとっても知りたかった。

その後ろには一人の男が立っていた。彼も炎魔と同じように龍牙魔術学園の制服を着ている、要するに同じ学園仲間だ。洋風なイケメンであり、体格は炎魔よりスラッとしていたがどこか引き締まっており、弱くは見えなかった。金髪はゲルでビシッとストレートに決めているがクセが強いせいか所々ツンツンだ。ちなみに額と眉毛は前髪のように完全に閉ざされていた。そして皮肉っぽく光る半眼は鷹のような鋭さを秘めていた。先ほど土方を止めていたエンジェルダストとか呼ばれていた人はこの少年だろう。

「中々律義なお人じゃないですか。」金髪の少年は炎魔に歩み近づいた。「この時勢で立派な謝罪に土下座をする男はそうそういませんよ。その律義に免じて今日は引き取ったらいかがでしょう？」

土方優は炎魔をチラッチラと見ながらどうするか考え込んだ。まさにその時に突風が巻き起こった。

学園物語で突風が巻き起こる目的はただ一つ、すなわち女の子のスカートをめくる為に！！

そしてこの場合でも例外ではない。

土方優のスカートは捲れるだけ上がり、お召しの物がMARUMI E。

そしてそのお召しの物は男の夢を跡形もなく粉碎する物だ。

一言で言えばスパッツを履いていた。

女の子のスカート捲ってもそこにパンツがあるとは限らない！！（後書き）

今回はちょっと短めです。ちょうど区切りがよくてサブタイトルも考えやすかったので（でたらめだけど）ここまでにしました。

さて、金髪の少年は一体だれなのか？

次回、転校生って謎めいた存在だけど本当は大したことは無い！

！

転校生って謎めいた存在だけど結局お前らと同じなんだよ！！

「チクシヨ、痛ってー。」炎魔は頬を押さえながら呟く。

先ほどの吹き荒れる風で捲れてしまったスカート。

その下にある男の夢を跡形もなく潰すスパッツ。

そしてそれに続く回し蹴り。

人間とはやれば短時間で途轍もない被害を出せる生き物であると同時にそれと同じくらいに被害に合うことが出来る。前者は十分な悪意があれば成し遂げることが出来る、だが後者は悪人だろうが善人だろうが関係なく運によって降り注ぐ。

昨晚、バズーカ被害に会い、悪い噂が流され、そして今朝はボコられる羽目に合った炎魔は不運を通り越して呪われている感じだった。

「まだ学園のチャイムの一つも聞いちゃいないのにもうこの様だと先が思いやられる。」彼は深いため息をついた。

「そうですね。」先ほど土方優を止めていたゲル金髪少年が同意する。

土方優のスカートの中身を目撃した炎魔を回し蹴りした彼女はそのまま表情一つも変えずに学園の校門へ向った。

もう暴力的行為に飽きてしまった炎魔は、その蹴りが無かったように振る舞い、彼に職員室への案内を頼んだ。

すんなりひきうけてくれたので内心、拒否の予知をしていた炎魔を驚かせた。

というわけで二人で職員室へと向っていた。

「ところでよ」炎魔は尋ねる。

「何でしょう？」前を歩くゲル金髪少年は返す。

「お前、なんていうの？」

「おお、これは申し送れました。近頃人とのコミュニケーションは最低限にしかしてなかったので、つい忘れてしまいました。僕は一年A組、テュラエル・エンジェルダストです。以後、よろしくお願

いします。それで君は？」

「俺は鬼崎炎魔、クラスはまだ知らない。師匠と山籠りしてたから少し常識がなつちゃあいないからよろしく。」炎魔は内心、普通の会話が成立しているのを感動した。

「すごい名前ですね。」テュラエルは苦笑した。「その上山籠りとは・・・さすが一夜で悪評が立つだけありますね。」

「いや、俺ただバズーカで撃たただけだから。」

「でもあの土方優さんに半殺しにされ、ワザワザ追いかけてくる所を見ますと禁断の実を食べる行為に勝ることをしたことは明白です。」

「テュラエルは面白そうに唇を歪めた。」

「う・・・まあ、いい物を拝ませてくださいました。」炎魔は小さく言う。

「やれやれ、初日であのお嬢に目を付けられてしまうとは・・・」テュラエルはクツクツと笑う。

「何かまずいか？」炎魔は胸に広がる不安を飲み込み、尋ねた。

「まずくはありません。」まだ笑いながらテュラエルは答える。「はつきり言えばヤバイです。今まで彼女を相手にしてただで済んだ人は今のところ君だけです。」

あそこまでやられて「ただで済んだ」ということ、土方優は普段何をしているのだろうか？というより何故炎魔はその程度で済んだのか。

「本来なら男を病院送りにするまでやめませんが、君はプライドを捨て、土下座で謝罪したためその程度で済んだでしょう。」テュラエルは分析する。「ちなみに、あのお嬢に手を出さないほうがいいですよ。絶対、君には落とせませんから。」

「うん、て言うか何の話？」と炎魔は突っ込む。

「そしてここが待ちに待った職員室です。」

彼らは引き戸の前に着いた。「職員室」と達筆で書かれたプレートがその上にぶら下がっていた。それ以外は別に何の変哲も無いところで案内がなければ確実に迷う。職員室は校舎の最上階の左端にあ

残酷ですね……というかコノ人こそに俺の名前が合っんじゃね？

炎魔は引き戸の前に力なく突っ立っていた。凶相巨漢の土方先生に教室へ案内され呼ばれるまで外で待てと命令……。もとい指示に従い、彼は立っていた。

体中から危険信号が張り裂けるほど鳴り、緊急撤退体制に移行するように体が悲鳴を上げていたが炎魔は逃げなかった。というより逃げられなかった。

ただでさえ怖い土方先生なのに、追いかけられたらさらに怖さを増すだろう。そうすれば体の緊急避難命令は取り下げることが出来なくなり、拳銃の果て、炎魔は追い詰められ崖から飛び降りてしまうかもしれない！

教室ではホームルームで先生が連絡事項を告げている間、一年B組は生きているのかを疑わせるほど静かだった。無理も無いと言うか、当たり前と言うべきか。

そして「では今日、皆さんに新しい仲間を紹介したいと思います。入ってきなさい。」と中から低い、土方先生の声が炎魔の胸を矢のように射抜いた。

ひっひっふっ、ひっひっふっの間違えた呼吸法をしながら炎魔は教室に足を踏み入れた。

教室は凶相巨漢の土方先生をぬけば何も変哲も無い学園ドラマでよく見る教室とほぼ一致していた。

クラスは25人程度で顔から判断すれば大半は性悪の顔にそれに似合ったアクセサリ、たとえばピアスやリーゼント、を装着していたが土方先生に恐れをなしてきちんと座っている。皆、先生を怖がっていると思いきや、二人だけ他のクラスメートの様に怖がっていなかった。一人は廃校寸前の学校にいそうなおさげでベタに厚いメガネをつけていた。そしてもう一人は窓際が一番後ろの席に座って

おり、ありえようか外を眺めていた。かなりの美人で男ならだれでも見とれてしまうような美しさがあった。金髪をポニーテールに縛り、眼はなんと右がエメラルドに匹敵する鮮やかな緑色でもう片方は深い海のような蒼だった。彼女の光景はさきほどから怖い土方先生しか見ていなかった炎魔の眼を癒すオアシスのようだった。

その癒しを糧に彼は土方先生の隣まで堂々と歩いた、これが後に厄介ごとを招くことを知らずに。

「自己紹介をお願いしようか。」土方先生は何故か喜んで頼んだ。恐らく炎魔があまりビクビクせず近づいてくれたのがうれしいのかもかもしれない。

「みなさん、始めまして。俺は北地方から来ました鬼崎炎魔です。」と炎魔は自己紹介し、名前を黒板に書いた。「田舎モンで迷惑懸けるかもしれないけどどうぞよろしくお願いします。ちなみに喧嘩に自信があるので俺に挑まないほうがいいです。」

クラスの空気が最後の方で一瞬変わったがすぐに正常に戻った。だが金髪ポニーテールの娘は夏の景色から目を背け、今度は炎魔を捉えた。彼の心臓がドキッと高鳴った。

「はいよろしく、鬼崎君。皆さん、拍手。」炎魔は自分の自己紹介なのにクラスと一緒に拍手してしまった。土方先生の声で頭が現実に戻ってきてしまい、ついでに背中に冷たく張り付いた恐怖心も一緒に。

「では君の席はあそこだ。」先生が指差したのは窓際の最後の列の前の席、つまりあの金髪美人の前だ。

炎魔はすり足でその席に着いた。

「ではホームルームを終わります。また帰りのホームルームで会いましょう。」そっくり残して土方先生は教室から去っていった。

一分後、全員が同時にプハッと息を吐き、それまで支配していた沈黙が破られた。

クラスで一番喧嘩が強くてモテないし、お米券ももらえない。逆にヤバイ人に

学園の授業は元貴族専用の学校だけあって難しかった。そして四時
限めが終わるとようやく昼休みになった。

炎魔は昼休みはどこか日が当たる場所でのんびりおにぎりを食べ、
心地よい風を堪能しながら過ごそうと計画していた。

購買に行き、おにぎりを買うことには成功し、任務の三分の一は達
成したと見て間違いは無いだらう。

残りの二つ、つまり日が当たる場所と風通しがいい所を見つければ
ミッションは成功とされる。

しかし、世の中すべて計画通りに進むことは少ない。炎魔はそれを
全身全霊で思い知らされた。

彼は今東区の体育館の日陰におり、七人のクラスメートに囲まれて
いた。

一体何故囲まれているのか、そして何故こんな所にいるのかは炎魔
も不思議に思った。

いい場所を見つけようと学園中うろついていたらこうなってしまう
た。

簡単に言えば迷子になり、たどり着いた所がよりもよって体育館
の日陰。

「随分と舐めた自己紹介してくれたじゃねーか。」そのグループの
リーダーだろうか、耳に付けているピアスの数は半端なく、鉄砲で
撃つても跳ね返ってくるんじゃないかね？と思うほど大量につけ、さらに
短い髪は金髪に染めており不良であることは疑いようも無かった。

他にいたっては似たような感じで制服とは合う筈も無いのにキャッ
プを履いていたり、サングラスにタバコを銜えてたり、赤い染みが
ついたバットを振り回していた。

「なんか用か？」炎魔は何事もないようにしゃけおにぎりを食べ始
める。

「随分と舐めた自己紹介してくれたじゃねーか。」と金髪はまた言う。

「いや、それもう聞いたから。それとも自己紹介の仕方でも教えてもらいたいのか？」

「なわけねーだろうが、このカス！」リーダーは怒鳴り始める。「知ってるか？転校生はな、一番強い俺様に従う義務があるんだ、テメーのそのノミのような脳みそもわかるよな？」

「へー、転校生は大変だな。」とまるで他人事のように呟く炎魔はおにぎりでべとべとになった指をなめている。

「何処までも余裕ブッコキヤガツテ！」不良グループの一人がキレた。「痛い目を合わないとわからないようだな！」そう言うと手を拳に変えるといきなり手が二倍の大きさ膨れ上がった。そして炎魔に目掛けてパンチを食らわせようとした。

炎魔は足で地面を蹴り上げ、土を相手の目に飛ばした。飛んできた土に視界を遮られ、気をとられたそいつは鳩尾に炎魔の飛び蹴りを食らい、後ろへ吹っ飛んでしまった。

「な、てめえ卑怯だぞ！」と何人か文句を付け始める。

「喧嘩に卑怯もクソもあるか！第一、七人对一で最初っからフェアじゃねーんだよ。大体、体強化魔術、自身のマナで体を強化する魔術使うとお前ら怪我するぞ。」と炎魔は怒鳴る。

魔術師が魔術を使えるのは体内に存在するマナを体力と精神エネルギーと混ぜ、変換することで使うことが出来る。どんな魔術が使えるかは決められているのもあれば決まっていないものもある。

一般的にエレメント魔法が多く、どれを使えるかは遺伝子で決められている。たとえば炎系魔術を扱う夫婦がいればその子供も高い確率で炎系魔術を使うという具合だ。まれに二つやすべての系統のエレメント魔法が使える人もいるがそれは例外。エレメント魔法のほかに体強化、体変化、武器魔法など色々ある。

体内にマナがあるものは全員、魔術陣を使うことが出来る。魔術陣は発動する時、術者である魔術師からマナを吸い取り発動する。魔

術を強化する物もあれば封印するものから時空の扉を作り、移動する手段を作るものである。

「何処までも舐めやがって。おい、こいつやっちまえ！」と命令が下る。

残された六人の不良は炎魔を半円に囲んだ。

炎魔から右の二人はナイフを取り出し、構える。リーダーの金髪の手元が一瞬光った次の瞬間、金属バットが握られていた。そして残りの三人は炎魔にけり倒されて泡を吹いている仲間同様、腕の筋肉を制服の抵抗に逆らい、膨らませた。そして全員炎魔に目掛けて突撃した。

猪の群れみたいに突進してくるクラスメートの単純さに呆れ、炎魔は溜め息をついた。

一瞬、薄い黒いオーラが炎魔を包んだ。

不良たちはいきなり見えないロープで引っ張られたかのように体育館の日陰の空中に持ち上がった。

ぐわ、苦しい。何だこれ。おい、下ろせ。と不良たちは空中で騒ぐ。彼らの首の周りには黒いパイプみたいなものが巻きついていて。

それをお構いなし白髪の少年は目を閉じて、両手を空中に浮いている六人に向け、浮いている皿を下から回すかのような動きを翻弄した。

すると空中に浮いている六人は電子が原子核の周りを回るようにラウンドに回り始めた。

普通こんなことされたら相手を罵ったりもがくなり何らかの抵抗を見せるはずだが六人の不良は以上に静かだ。

結構早く回されている上、首も絞められているのだから苦しい&気持ち悪くなるわけで全員こみ上げてくる吐き気を必死で押さえている。何か音を発すれば嘔吐してしまうというほどギリギリなわけである。

炎魔は彼らを数十回まわした後一人ずつ解放した。

絡まってきた不良は一人悶絶、後は息を荒く立て地面に転がってい

た。

白髪をかき、心底呆れた顔でその場を去った。東区を出て、本校舎へと通じる道を見つけ、それを頼りに本校舎にいこうとした。

その時に突風に会った。右腕で目を守り、風が過ぎるまで待とうと思っていたら今度は竜巻に襲われた。

炎魔が状況を理解できる前に体が風で宙に浮き始めた。そして竜巻は炎魔を高く飛ばし、本校舎の裏にある南区へと連れ去った。

飛ばされている途中、炎魔は竜巻の影響でめちゃくちゃに振り回されていて一体何処に飛ばされているのかは見えなかった。

しばらく立った後、竜巻が収まり、炎魔は後頭部を強打して地面に落ちた。

「 @ % ^ & * () (* & ^ %) 」と訳の分からないことを言いながら後頭部を押さえながらごろごろとたた打ち回った。要するに痛いわけである。

「随分と派手な魔術つかってるわね。」と女の子の声がかかった。炎魔は後頭部の痛みを無視し、素早く立ち上がった。

どうやら知らない建物の中へと運ばれたらしく、もう外ではなかった。

部屋は広く、丸い形をしていた。上にはシャンデリアがつる下がっており、台所やトイレもあり、ちょっとした豪華な一室アパートという感じだった。さらに小さな木やサボテンも飾っており、独特な雰囲気漂わせていた。部屋の真ん中には丸い形の半径2メートルの机があった。それには六つの背中の部分が王座みたいな椅子があった。

そして北方面の窓には何故かソファがあり、先ほど炎魔に声をかけた主が座っていた。

それはクラスで炎魔の後ろに座っているちょっと癖毛の金髪ポニーテールの美人だった。

クラスで見せたつまらなさそうな表情はなく、今はまるで新しいおもちゃを発見した子供のように眼を輝かせ、口がニンマリと歪ませ

ていた。そしてその手には望遠鏡が握られていた。

「さっきの喧嘩は一部始終見させてもらったわよ。」彼女はニマニマしながら言う。「ただのそこら辺にいるような雑魚チンピラかと思っただけど転入生にしちゃ中々やるわね、森永くん。」

「誰が森永だ！？俺には鬼崎炎魔って名前があんだよ、嬢ちゃん。」
炎魔は少しキレる。

「私の名前は雷神アテネ（らいしん あてね）、龍牙魔術学園生徒会長よ。」とポニーテールは炎魔を無視して自己紹介する。「ちなみに、私のことを雷神とかアテネって呼んだらまたさつきみたいに飛ばすわよ。」

「じゃあ、どう呼べばいいんですか、お・ひ・め・さ・ま。」と炎魔は最後に皮肉を出来るだけ込めて聞く。

「あら、察しがいいわね。」アテネはいっそううれしそうに笑い、ソファアから立ち上がった。「私はこの学校でそのあだ名を貰っているし、気に入っているからあなたもそう呼びなさい。」

ただ教室に戻りたかっただけに竜巻に巻き込まれ、知らない場所（とは言ってもまだ初日だから知っている場所のほう）が圧倒的に少ないから当たり前と言えば当たり前だ）に放り込まれ、そして傲慢と言っても過言ではない女の子と対峙し、姫呼ばわりするのを要求され、そして何故竜巻を巻き起こし、彼をここへ連れて来たのかの理由も聞かされていない。炎魔が嫌な予感を抱くのも無理も無からぬことである。

しかし竜巻を引き起こしたと聞いたときには炎魔は内心、感服した。何故なら風系の魔術は繊細な動作は恐ろしく難しいとされている。普通の風系の魔術師が竜巻で人を運ぶ時は必ず嘔吐し（運ばれている人が）、関節をすべて折られている。最悪の場合死んでいる。それだけ竜巻の加減は難しいのだ。それをやってのけ、相手は大丈夫だったかも見ない余裕は16歳の少女にしてはかなりの実力を持っている事が伺える。

「で、俺をここまで運んでくれたには大した理由があんのか、姫っ

ち？」と炎魔は聞く。初対面の人を姫と崇めることは炎魔のプライドが許さなかったもので他の呼び方を考えていたら姫つちにたどり着いてしまった。

「お姫様と呼びなさい。ここに連れて来られた理由？それはね・・・」
アテネは一瞬間を置いた。「面白そうだから。」

「は？」

「優ちゃんの聖域を犯してもまだ生きていて、白髪に赤眼で、目付き悪くて、不思議な力を持っていて、まだ一目なのにもうこんなに騒ぎを起こして最終的に喧嘩までしちゃってる。こんな人を生徒会に加えたら学園生活が楽しくなると思ってここへワザワザ運んであげたのよ。」

「なるほど。が、俺は生徒会には入らないぜ、残念だったな。」
炎魔は余裕をかましますがそれでは逃げられない気がした。

「あら、もう入れちゃったわよ。」とアテネは炎魔の嫌な予感を的中させ、何処から出したのか申込書をぺらっぺらっつと振る。「あなたの自由意志なんて必要ないのよ。」と言い、悪魔のようにニカッと笑う。

「早っ！！しかもひでえ！！」炎魔はつつこむ。

「今日からあなたは生徒会雑務係に決定するわ。」アテネはさらに続ける。

「しかも最低なポジションじゃねーか！！」炎魔はアテネが持っている紙を奪おうと彼女へ向ってダツと走りだす。

がそれはいきなり巻き上がった突風によって拒まれ、炎魔の視界を一瞬遮る。突風が過ぎるとアテネの後ろにあつた窓が開いており、彼女はその窓際に立っていた。

「コレをいまから松平学園長に判子を押ししてもらえれば鬼崎くんは晴れて私の生徒会の一部よ？ちなみに生徒会は途中からは引退出来ないし、出来たとしても、最後まで成し遂げられない奴」として学園生活に響くわよ。それじゃあね？」と言って窓際を蹴り、外へ飛んだ。

何とか捕まえようと炎魔も窓際にジャンプするがアテネはもう風の力で空高く飛んでおり、もう捕まえようが無かった。炎魔は齒軋りしながら昼間飛べないことに悔しんだ。

アテネはその姿を見て子供ののように腹を抱えて笑い出した。その笑い声は青い空に響き渡った。

クラスで一番喧嘩が強くてモテないし、お米券ももらえない。逆にヤバイ人に

無理やり生徒会に入れられた炎魔、一日だけでどんだけひどい目にあってんだ？ちよつと多くね？

ま、こんなくだらん話でも読んでくれる人たちがいて、正直うれいすね。ちよつと表現がへたくそですが大目に見てください。それがコメントでも書いて、間違いを指摘してくれればうれい限りです。

ちなみに生徒会室の説明があやふやになっちゃってすみません。後にマシなものにするんで。

たまにはいいこともあるぞ

深いため息が龍牙魔術学園の女子寮の屋上で夜空に吸い込まれていった。

「今日は何てツイていないんだ・・・」炎魔は呟く。山から降りて初めて得た学園生活を胸が弾けるほど楽しみにしていた炎魔は一日の終わりには正直がっかりしていた。

悪いことは何もしていないのに男が嫌いという理由で出鱈目な噂を流され、女子には嫌われた。しかも不良を簡単にやつつたため、クラスでは避けられていた。そしてさらに男子に軽蔑の眼差しを一身に受けることが判明した。何故なら朝、炎魔が土方優に土下座をしたことが気に食わなかつたらしい。男女差別がまだ健全で男が有利なコノゴ時世、彼女みたいに男に反抗する女性なんぞに土下座をするのは殆んど許されないという領域に達していた。

というわけで炎魔は一日で学園の有名人になった。

しかもそれに追い討ちをしかけるかのように生徒会長、雷神アテネは学園放送で炎魔が生徒会に入ったことを放送した。

コレだけ起きてても機嫌がいい人はとんでもない馬鹿かポジティブ思考すぎるかどちらかだ、が炎魔はそのどちらでも無いので屋上で唯一のベンチの上に寝転んでふて腐れていた。

「そう言えば・・・」炎魔は夜空を見ていて気づいた。「星、見えないんだな・・・」

炎魔が来た山、っていうか山岳地帯では夜になると星が結構見えた。人にはあまり聞かれたくない修行で疲れ果てたときによく見えて、癒された。

そして一番精神の癒しが欲しい時に限って星を眺めることが出来なくて、不機嫌さがさらに増した。

まあ、纏めると炎魔は一触即発の最低最悪のムードだった。

せめて最悪な一日を最悪に終わらせないために炎魔は屋上で一人に

なつて静かなな時間を過ごしていた。
がそれすら叶わなかった。

屋上の扉が派手な音で開き、誰かが来た。鬼崎は見つからないように闇を身に纏い、姿を消した。

別にその場から消えたわけではなく、他人の視界から消えただけで炎魔はまだベンチの上で寝転がっていた。

屋上に来た女子は合計四人、一人は何処かで見ることがあるオサゲの少女でもう一人ブルドッグみたいな顔の女の子に腕をつかまれていた。一人は腕を組み、長い茶髪が風にゆれ、そして頭のほうには狐の耳みたい髪に髪の毛が立っていた。最後の一人はその長い茶髪の隣に立っており、こっちはトドみたいな体格をした女の子だった。もうすでに問題アリアリな臭いが漂っていたので炎魔は見つからずにやり過ごそうとした。

ブルドッグみたいな顔の娘、略してブル子はオサゲを乱暴に押し、彼女は地面に転がった。

「やっちまいな。」と長い茶髪の子、以下狐っ子は冷たい声で命令した。どうやらこの三人組のリーダーらしい。ブルっ子とデブの子、略しハム子はにたりと笑うとオサゲを蹴ったり殴ったり、今で言う虐める行為に値するものだ。

不思議な事に虐められている本人は抵抗の素振も見せず、ましては音も上げずに受けていた。それが面白くないのか二人のブスの虐めがエスカレートしてきた。

「おい！そろそろいい加減にしろ！」炎魔は堪りかねてとうとう口を出してしまった。何もせずやり過ごそうとした決意は何処かへ飛んでいってしまったらしい。

四人の女の子はすぐく驚いたのか、全員空中へ緊急回避、つまりジャンプした。

その絵図があまりにもおかしく、鬼崎はブツと吹いてしまう。

「なな、な、何だてめえ！？」とハム子は^{デブのほう}ビビリ声満タンで強気に言ってみるが迫力がない。

「そのお嬢ちゃんが何したか知らねーけどよ、もうここで引き下が
りな。」炎魔は要求する。

「へっ、それは残念。」狐っ子は前に踏み出しながら言う。「こ
の子は今日、男の頼みを聞いて従ったんだぞ、あたしは男の屈する
女は大嫌いだ！」

「それをどう解釈すればこいつをボコボコにしている理由になるん
だ？そもそもお前参加してねーし。」と炎魔はため息交じりに指摘
する。

「次にこいつがまた男なんかに従わなくさせるためだ！」

「何で男の頼みを聞いちゃいけないーんだ？たとえば学園長に職員室
にある花瓶を持ってきてくれと頼まれたらお前断んのか？」と鬼崎
はじれったく言う。

「学園長は別だ。あのおっさんは強い、だがこの男共は全員弱い。
あたしは弱い男は嫌いだがそれに従う女はさらに嫌いだ！」狐っ子
は吼える。

「ほう、」炎魔はにやりとニヒルに笑う。「ということは今俺がお
前を倒せばお前は俺に従うと解釈していいんだな？」

「出来るもんならやってみやがれ、この白髪！！」
そっぴい終えた瞬間、炎魔はもうすでに狐っ子の前に立っていた。
そして彼女が反応する前に鬼崎は外道にも彼女のかわいらしい顔に
膝蹴りを決める。それだけでは足りないのか、地面に着地した後さ
らに鳩尾にパンチを決める。

狐っ子は声を上げる暇もなく、泡を吹いて倒れる。これだけのクリ
ティカルヒットを受ければ当然だが。

他の二人と炎魔は信じられないと言う顔で倒れた者を見た。

「有希さま！！」二人は倒れた狐っ子に駆け寄り、跪く。

炎魔はまだパンチを繰り返したポーズのまま、その場から動かなか
った。

「畜生、覚えてろ！」と彼女らは気絶した狐っ子を持ち上げ、捨て
台詞を吐きながら降りていった。

しばらくの間、沈黙が続いた。

実はと言えば炎魔はさっきの膝蹴りが決まるとは思ってもいかなかった。もし、至近距離で放ったのならはなしは別だが、炎魔は遠くから走ってきて繰り出した。これは当たり前が無いと思っていたので小手調べにやっただけなのに思いのほかにクリーンヒットしてしまった。その後には繰り出した拳は反射的に出たもの、というより膝蹴りはフェイントでパンチで決める連続技として考案したものだ。だがどちらも当たってしまい、気の毒に思ってしまった。

「あの・・・」と後ろから話をかけられた。

振り向くとそこには先ほど虐められていたオサゲが立っていた。

「あの・・・助けてくれてありがとうございます。」「声をつつかえながらオサゲは頭を下げた。

「こちらこそありがとう」と炎魔は彼女の手を取り、涙を流しながら感謝した。今日一日女の子に散々な目に会わされた炎魔にとつてこの感謝の言葉は砂漠にあるオアシスにも等しいぐらいの癒し効果があり、逆に彼のほうから感謝してしまった。

「え？」オサゲ（一応言っておきますが名前じゃありません）は首を傾げる。

「あ、いや、すまん。こつちの話だ。」炎魔は手を振りながら誤魔化す。「それより怪我は・・・」「無いかと聞こうとした炎魔は目を張る。

「何で怪我してねーんだ？」さっきの女の子の二人に結構やられていたにも関わらず、怪我や擦りむいた跡すら殆んど無かった。もちろん制服を着ているから見えない部分も多いが、足のほうは殆んど無傷だった。

「あ、それはですね、」彼女は焦りながら説明する。「私、回復魔術^{ンゲ}を習っていて、君が固まっていた時に自分にかけたの。」「

「ふーん、なるほど」炎魔は納得するが完全に信用はしなかった。

「でも本当にありがとうございました、鬼崎君。」と彼女はまたペコリと頭を下げる。「私、雪白鈴奈^{ゆきしろ ねいな}って言います。このご恩は何時

か必ず返します。」

「別にいいよ、お礼ならもう貰った。それより何で俺の名前を知ってるんだ？」と炎魔は尋ねる。

「今日、私のクラスに転校してきたじゃない。」彼女はクスクスと笑う。

炎魔はそこで自分のクラスにオサゲがいたことを思い出し、今彼の前に立っているオサゲであると。

「ではまた明日ね。」とニッコリ微笑み、雪白はその場を去った。

炎魔は彼女が屋上の扉を閉めるまで見送り、そして夜空を見上げた。

「どんな腐った日でも、良い事はあるんだな」と炎魔の呟きを聞いていたのは三日月だけだった。

たまにはいいこともあるぞ（後書き）

ちなみに筆者は顔面に膝蹴りを食らったことないのでよく分かりませんが、痛そうなのは確実じゃね？

面倒事は群れでやってくる。

翌朝、炎魔は精神的に疲れていたにもかかわらず遅刻フラグを無視して早起きして学園へ向った。というよりハンモックの紐が肌に残り込んでグツスリ眠れなくて早起きしてしまっただけである。

そんなわけでホームルームが始まる20分前にもう教室にいた。教室には誰も居らず、初めて静かな時間を過ごすことが出来た。

二十分後

「え〜ではホームルームをはじめます。」と土方先生は今日は豚の仮面を被り、そう宣言した。怖いおっさんが豚のマスクをするとシユールだがなぜかチエーンソーで誰かを斬った後の返り血を浴びた赤い模様が右頬に描かれているので怖い、合わせてシユール怖い。

「今日は今週末行われる二日一泊の遠足について話し合おうと思えます。これは一年全員が参加する行事です、まだたがいに馴れ合っていない君たちが遠足で友達を作ったりすることが目的です。詳しいことは五時限目のロングホームルームで話し合いますがそれまでに五人一組の班を作つといてください。あまつた人たちは余った人たち同士で僕が組み合わせるんで。あと鬼崎君、ちよつと来てくれるかな？」土方先生は教室を出て行こうとすると炎魔を手招きした。炎魔は三回回つてワンと吼え、お経を唱えながら震える足で土方先生と廊下へと出た。

「実は君に頼みがあるんだ。」と土方先生は真剣に言うが怖さが増しただけ。しかも不気味な仮面を炎魔の顔に近づけ、炎魔は失神してしまいそうだった。

怖い！！豚さん怖い！！頼むからお肉屋さん来てくれ！！そしてこいつを裁いて地球の反対側で売り飛ばしてくれ！！頼む！！三百円あげるから！！！！と炎魔は心の中で叫んでいた。

「今日のロングホームルーム、君がクラス委員長のかわりに遠足の件を纏めてくれ。」と先生は言った。

「なんで俺が?!まだ二日めだぞ!!!!」

「何故このわたくしめがクラス委員長の務めを果たすことが許される立場なのですか?」炎魔は知っている限りの敬語を使い、たずねる。

「雷神アテネさんが委員長なんだけどあの子、凡人の仕切りをするのはいや」と言っただけだ。

「だったらなんのために委員長になったんだ?ってか生徒会長なんだから、アレ!!」

「それがどうつながればこのわたくしめがそのようなことを?」

「君は昨日の喧嘩で一応一目置かれているからクラスも一応言うことと思うし、もう一日で生徒会の一員になるほど雷神さんに見込まれているからだよ。それに僕のことを怖がらずに接してくれたからだよ。」と土方先生は仮面の後ろでニッコリ(見えません)笑った。

「何言ってるんだ?!?!?こえええええーよ!!!360度あらゆる角度から見ても怖ええええーよ!!!怖すぎるから三回回ってわんと吼える真似までしちゃったじゃねーか!!!」

「一目置かれてるって、それただ警戒されてるだけだろうが!!!というよりあの喧嘩、誰かチクツたのか?!しかも生徒会には強引に入られただけだ!!!あんなに世界がどう見えてんだ?!」と炎魔は是非突っ込みたかったが体は言うことを聞かず。「任せてください。」と引き受けてしまったのだ。

ということがあった。世界には「文句が言えない立場」にいる人の仲間入りしてしまった炎魔。そんなわけで五時限目のロングホームルームが近づいたときにテンションが下がりがつつある白髪の少年は昼休みになると購買に行つてゴマおにぎりをかう所で残っていた気力(昨日の件での精神ダメージはまだ完全回復していない)が窓から

小鳥達と一緒に飛んで行ってしまい自分の席に戻るとぐでぐと倒れこんでしばらくの間その状態のままだった。

「あの、鬼崎君？」とふと声がかかった。

「返事がない、ただの蠅人形のようなだ」と炎魔はかん高い声で返事する。ネタ間違ってるけど。

「一緒に座って食べても良いかな？」

鬼崎はここでやっと見上げる。そこには雪白鈴奈が照れた風に立っていた。

「いいけど・・・ちょっと待ち。」炎魔は座りながら隣にある机を自分の前に合わせ、椅子を足で釣り向かいで座れるようにした。

「あ、あ、ありがとう。」とお礼を呟く鈴奈。

鈴奈が弁当箱の包みを解いている間、炎魔はゴマおにぎりを頬張りながら彼女を眺める。

地味なオサゲに眼鏡が目立ちすぎて一見地味に見えるが良く見ればスタイルはかなり高レベルだった。そして眼鏡の奥に光る蒼い眼は大人しそうな雰囲気を出しながらも強いなにかを感じることが出来た。

炎魔の視線に気づいた鈴奈は少し頬を染めた。

「と、ところで鬼崎君は昨日、どうして私の事を助けてくれたの？」見つめられて恥ずかしいのか炎魔との会話を始めようとした。質問の内容も少しは正しい分類に入るが。

「随分損な性格しているからさ。」炎魔はぶっきらぼうに言う。「あまりにも一方的に私刑リンチされている人を見ると誰だろうが助けつちまうという面倒な性分だね。ま、これも何かの縁だろう、もし困った事があったら問題解決、とまでは行かんがアドバイスぐらいならやれる。」

「あ、ありがとう、鬼崎君。所で君の事で聞いていい？」雪白は聞く。

「この白髪と紅眼は本物だ。」と炎魔は会う人99%が必ず聞く質問ナンバーワンを質問される前の答えた。

今、髪を染める方法は大きく分かれて二つ。

一つは原始的に髪に直接色をつけるタイプともう一つは薬を飲み、文字通りに生えてくる髪の色を変えろという方法だ。だが後者はまだ最近可能になった方法でまだ欠点も多い。一番の欠点はその薬は生えてくる髪のみ有効で普通に髪を染めた人たちの逆、髪が生えるまで待たなければいけない。もう一つは眼の色が染めた髪の色と同じ色になってしまうことだった、これの原因はいまだに解決されていない。ただ健康に害するものではないし、視力にも全く影響がないため販売は許されている。

炎魔の場合、髪の色は染めたとしても紅い眼は珍しいため、人々を混乱させ、結局最初の質問はそこに来るのである。

「いや、それじゃなくてね。」どうやら炎魔の早ちとりだったらしく、両手を振って否定する。「ただどんな魔術を使って隠れてたの？私、鬼崎君がそこにいるなんてぜんぜん気がつかなかった。」
「昨晚、炎魔が現れた時に地面に倒れていたにも関わらず飛び上がったのだから相当驚いたのだろう。そのシーンを思い出してしまい、炎魔はプツと吹いてしまう。」

「俺の魔術『闇の力』はちょっと例外でね、一体なんなのかは俺もわからない。ただわかるのは暗闇の中で色々出来ることだけだ。昨日の夜、俺は闇と・・・まあ一体化していたと言えば一番適切かな？その状態だと誰も俺をみつけることは出来ない。」

「へー、そうなんだ。あれ？」雪白は何か思いついたようだ。「じゃあ、何で女子寮の屋上にいたの？そこじゃあ誰も除けないよ？」
「いや、もういいもん拜ませてもらった後だったからクールダウンが必要だったのさ。」炎魔は到底自慢できないことを爽やか過ぎる声で言った。

「つつこみ所がちがうだろ、貴様！！」突然炎魔の後ろからピシッと鞭を撃つような鋭い声が響いた。

振り向くとそこには額に青筋を立てた土方優とテュラエル・エンジンダストが立っていた。

「よう。」炎魔は挨拶する。「雪白さんになんか用か？」

「もしそうだったらなんで貴様が聞いている?!」土方優は答える。「まあ、確かにヤンキーよりそちらの麗しきレディーに用件があれば僕もうれしい限りですが今日はあなたで我慢しなければいけません。」テュラエルは皮肉を込めてコメントする。

「聞いたくないが、何のようだ？」炎魔はため息をつく。

「昨日の君の暴行の件についてです。」とテュラエルは説明する。

「君は昨日、昼休みに自分のクラスメート七人をおもちゃのように弄びました。」

「そして昨晚、貴様は女子生徒の顔に膝蹴りを食らわせたそうだな。」

「今度は土方も参加する。」

「ちよつと、それは・・・」雪白は炎魔を庇おうと、事情を説明しようとしたがその庇う本人にさえぎられてしまう。

「だからどうした？」炎魔は挑戦的に聞く。

「普通の生徒であれば体罰を与える権利が我々生徒会執行部員にはある。が、君も生徒会の一員である以上、そう簡単にはいかない。」と優は説明する。

「で、俺はどうなるんだ？」炎魔は内心、このまま免除されると期待し、生徒会長のアテネに感謝した。

「貴様は生徒会の看板に泥を塗った。それにより、三日後、遠足に行く前日だが、全生徒の前で貴様と我々生徒会執行部員及び会長が決闘を行う。」

前言撤回。最低最悪の状況に炎魔は陥ってしまった。

面倒事は群れでやってくる。(後書き)

さて、ドSな作者のせいで委員長を務めに決闘まですることになった炎魔。

果たしてすべて裁ききれるか？

次回にはまた新たなヒロインでるかな？

決闘の理由は大抵ろくなもんは無い！！（前書き）

少し短くなっちゃいました、すみません。

まあ、それでも読んでくれたらうれしい限りです。

まあ、前のコメントを参考に少し変えてみました。

決闘の理由は大抵ろくなもんは無い！！

「っていか何で決闘?!」炎魔は食い下がる。

無理やり入れさせられた生徒会の看板に泥を塗ったから罰が下るのは百歩譲っていいとしよう（良くは無いが）、だがそれをどう考えれば決闘という結論に達するのか炎魔は是非、知りたかった。

「君を極限にまで屈辱を味あわせるためです。」とテュラエルは説明する。「当初は君に道具なしで舌だけでトイレ掃除をさせる予定でしたが学園長が許可しなかったので決闘になったわけです。」

「わあ、うれしいな。」と炎魔は引きつった顔であいづちを打つ。

「他にもローション相撲もあつたのですが、残念ながらそれも拒否されてしまいました。」

「うわ、すごい残念そうな顔してるよこいつ。ひよつとしてやりたかったの?」と炎魔はテュラエルのすごく残念そうな顔にたこ口になっっているの見た。

「せつかく必殺技を磨き上げたというのにまことに残念です。」とテュラエルはもつと残念そうな声を出す。

「うわつ、この人マジだよ。イケメンでその趣味のほつが俺は残念だと思つぞ?」と炎魔はつつこむ。

「新しい技まで考え出したと言うのに・・・」

テュラエルはそういうと教室の隅にある掃除道具が入っているロッカーの扉を開け、入った。そしてこの世を恨むかのような顔で中から閉めた。

「おい、誰か警察を呼んでくれ!まだ犯罪起きてないけどなんかこ

「いつヤバイ!!」

炎魔は半分食べたおにぎりを耳に当てる。「もしもし?」

数分後

「まったく、だから男は情けないから嫌いだ!」

土方優はフンツと鼻を鳴らす。パニックってる炎魔をハリセンで落ち着かせ(というより一方的に私刑しただけ)、絶望しているテュラエルをロツカーから引きずり出した。

「はい、すみませんでした。」と男二匹は口をそろえて言う。しかも何故か正座である。

「とにかく、決闘は金曜の放課後四時、学園の中庭で行う。東西南北の区の真ん中にある公園みたいになっている。そこで殺る。貴様からの質問は受け付けない。」と土方優は改めて決闘を言い渡す。

「はい、質問!」炎魔は手を上げる。

「最後の部分無視したな、貴様?よかるう、今日は仏心に近い優しさを持ち合わせているから聞いたやるう。」

「決闘って本当に戦うやつか?それともなんかこう、運動会みたいに先に間食したほうが勝ちとか、そういうのか?」

「いや、最後のほう結局早食いではないか?!」土方優は少しキレる、質問に応じたことを少し後悔しながら。「ちゃんとした決闘だ。拳も、脚も、魔術も使ってもいい。それにちゃんと医務室の先生と保健員達が貴様の面倒をみるかもしれない。」

「俺が負けることはもう前提かよ。しかも、見てくれるかも、かよ、

保健員の立派な志は海にでも落つこととしてきちまったか？」炎魔はまたしてもつつこむ。

「では、楽しみにしているぞ。」と土方優は言って、テュラエルの襟首をつかみ、彼を引きずりながら教室を後にした。

「決闘申し込まれちゃったな。」

炎魔は他人事かのように振舞う。

「ごめんなさい！」雪白鈴奈は激しく誤る。「私を助けてくれたのに、こんなことになっちゃって……それに言い出せなくて……ごめんなさい！」

彼女にはよほど申しわけないのか何度も誤り、その度に頭を下げる。両側にたれているオサゲと一緒に動かないところがすごかった。

炎魔は雪白が頭を下げた所に手をポンつと置いた。

「なぐに、気にすんな。もともとお前のせいじゃないし、俺が勝手に手を出しただけだ。お前が気を病む必要はねーよ。それに弁解しようとしてくれたじゃねーか、それだけで十分だ。」

炎魔は少し涙声になっている雪白を慰めると同時に頭を撫でてやる。

・龍牙魔術学園中庭・

「あいつをどう思う?」

土方優は生徒会室へ戻る途中、一緒に歩いているテュラエルを尋ねる。

「彼はローション相撲がお嫌いなようですね。」

テュラエルは残念そうな声で言う。

「そんなことを聞いてない。」

優は額に青筋を立てながらつつこむ。

「残念ながら何も分かりませんね、ただ面倒ごとを引き付ける才能があることと喧嘩好きであることぐらいしかわかりません。」

「どうしたらそれがわかるんだ？」

土方優は聞くが、内心悔しがっていた。テュラエルは外観を見ただけで人の性格がわかってしまうほど、観察力が鋭いのだ。男に何かで負けるのが嫌いな優はそのために相当悔しがっていた。

「まあ、わずか二日で我々の生徒会女王様に目をつけられる羽目に合う人は面倒ごとに巻き込まれやすい人たちだけです。おまけに貴女に追いかけて、こともあろうがハプニングキ、グハッ！」
そこまで言うとテュラエルに土方優の肘が顔面に直撃し、黙らされてしまった。

「そのことは二度と口にするな。」

土方優は怒り籠もった声でそう言い、先ほどの一撃で沈没してしまったテュラエルを置いていった。彼女の顔は真っ赤だった。

そしてテュラエルの顔も血で赤く染まった。

決闘の理由は大抵ろくなもんは無い！！（後書き）

次回予告に出てきたヒロインいねーじゃん！！（自分っこみ）

暴力で解決しようとするとかえって悪化することがある

キンコーンカーンコーン。

ついに昼休みの終わりを告げるチャイムが容赦なく五時限目の始まりを告げた。

先ほどまで空っぽだった一年B組の教室にゾロゾロと生徒たちが入ってきて、席に着いた。

ガヤガヤ騒いでいるクラスメートを横目に炎魔は緊張した。

人前にさらされるのは慣れていたが立つのに慣れていなかったし、まだクラスとは馴染んでもいないし、それに資料も何も無いので一体何をすればいいのかもわからない。

ハア、と炎魔がため息をついた所、引き戸が開き土方先生が入ってきた。入ってきてしまった。

数秒前までは騒いでいた生徒たちは一気に静まり返り、席を離れていた者達は目にも留まらぬ速さで席に戻った。

土方先生は（仮面の下から）咳払いをした。

「えー、今日は週末の遠足に向けての打ち合わせをします。」土方先生は始める。「遠足は江戸の郊外にある青松山岳地帯の頂上の龍牙学園の私有している別荘まで山を登り、そこで二日一泊過ごしませう。待ち合わせは土曜日の早朝、6時ですので遅れないように。ちなみに寝坊して、遅刻した人たちは先生と補習ということになっています。」

最後の部分はもはや脅しに近かった。おまけにコレは遠足ではなくもはやハイキングだ。これで遅れてくる馬鹿はいないだろう。

「あれ？先生は一緒に来ないんですか？」と炎魔は尋ねる。担任なのに何故付いて来ないのか不思議に思った炎魔は不意に口を開けた。

「つーわけでさっさとやっちなうぞ。」炎魔は教卓の後ろに立ち、はじめの。「五人一組の班だ。決まっている奴らは手を上げる、そして指されたら他のメンバーも引き連れて来るといシステムだ、簡単だろう・・・っていか手前ら何してんだ？」

炎魔が説明している間、クラスメートの大半は席を離れて喋ったり、トランプを遊んだりしている。

「おい！！何やってんだ？！そんなことは後でやれ！！これやんないと俺が困るんだけど！！」

と炎魔の怒鳴り声も空しく教室の騒ぎの中に消えていった。

唯一、雪白鈴奈が彼を心配そうな目で見ていたが彼女も打つ手は無く、炎魔を見守るしかなかった。

口が達者な人は人をふり向かせるような演説でこの場を収めるだろう、又ある人は勝手に自分で話を進めて怒られる羽目に合うだろう、又は派手な芸を披露して注目を集め、そしてその場を乗り切るだろう。

鬼崎炎魔は右手を天井に伸ばし、掌を開いた。

紫色の雷が辺りを照らした後、炎魔の伸ばした手には巨大な剣が握られていた。

その剣は柄も加えたら炎魔と同じぐらい長く、黒いのに鈍い輝きを放っていた。

刃は両刃で先端部分のほうが付け根より幅が広く、切っ先は大剣には似合わずとんがっていた。

その大剣の柄は日本刀みたいに長方形を丸くした形みたいであり炎魔の二の腕の長さを包帯らしきもので巻かれている。そして柄の握りの部分と刃のあいだには柄と同じくらいに長い燃え盛る炎の形をした鍔（？）が刃の付け根と同時に鍔の役目を果たしていた。

炎魔はその大剣を振り下ろし、刃の切れない横の部分を使い教卓を耳が劈く様な音と共に木っ端微塵に破壊した！

教室は一瞬にして静寂が訪れた。

「さて、結構静かになった所でさっきの続きでもしようか。」

炎魔はこの静寂を利用し、班まとめを一気に済ませようとした。

「さっきも言ったとおり、班が決まっている奴らはここに並んで名前を言え、そして俺が班をリストに書き込んでいくという、極簡単なシステムだ。」

そこで大剣がまた紫色の雷と共に消えた。

よほど驚いたのか、それとも怖かったのか誰も反抗することは無く事はスムーズに進んだ。

そして20分後、班まとめを終了した。

「うっし、これで全員五人一組に分かれたな。後は俺と雪白と生徒会長が残ったか・・・」

一年B組の33人を五で割れば、三人余るのは無理も無いことだ。

どうしようかと考えていたら教室の引き戸が開き、なんと土方先生が入ってきた！

「あ、土方伯爵先生、班分け終わりましたが三人余ってしまったんですけどどうしたらいいでしょうか？」

と炎魔は担任が入ってくるいなに尋ねる。

が土方先生は答えなかった。

引き戸の所で呆然と立っていて動かなかった。

「鬼崎君、あれは何かね？」ついに声を発声し、指である所を指した。

炎魔はその指を辿って振り向いてみるとそれは木っ端微塵になっている教卓だった。

顔が蒼ざめ、弁解しようにも声が出ず、丘の上の金魚のように口パ

クパクさせる。

「あれ、学校の私物だってしってるよね？」

土方先生は炎魔の前に立つ。その威圧はは恐ろしく、窓に亀裂は走った。

「それにあれ、僕が作った物なんだ。趣味でこういうの作るの好きでね、壊されるのは結構いただけいなあ、鬼崎君。」

炎魔はそこに立ち尽くして一步も動けず、顔も死人に負けないくらい真っ青になりつつある。

土方先生は炎魔の襟首をつかみ、彼を引っ張りながらそのまま教室を出た。

しばらくすると校舎の地下へと通じる階段を下りて一つの部屋の前についた。

その部屋のプレートには「生徒指導室」と書いてあった、そしてその上にはこう落書きされていた、「生徒死道室」と。

先生は鉄で出来ているドアをギイイイイイイと開き、炎魔を引きずりながら入り、ボタンと派手な音と共に閉まった。

ギヤアアあああああああああつあああああ……！！！！！！！！！！

一つの断末魔が校舎中に響き渡った。

暴力で解決しようとするとかえって悪化することがある（後書き）

何されたかはあえて言いません^^

ちなみに大剣の説明が下手で（すいません）イメージが沸かない！
というひとはデビルメイクライのリベリオンという大剣を頼りにがんばってください。

大参事は一瞬の隙から生まれる。

放課後……

「何だ、これは？」

放課後の委員会会議で発せられた最初の言葉だった。

生徒会室で行われている委員会会議は一年A組からG組までの七人の委員長で遠足の事について話し合うという感じだ。ここで班分けで余った生徒たちをどうするか、役割分担や注意事項について話し合うという流れである。あつたはず。

委員会代表はA組の委員長、土方優。

彼女が見据えているのは委員会会議が行えない原因を作っているB組の委員長の席に座っているナニカだ。

白い髪に紅い眼、悪人のような悪い目付き。

早い話、鬼崎炎魔である。

パイプ椅子に力無く座っており、口から蟹のように絶えず泡を吹き出している。

そしてその相貌は悟りでも開いたかのように虚ろで天井を眺めている。

さらに何故か顔に落書きされていた。ちよび髭にアイパッチ、額に「肉」、その上、頬にはリアルタッチなガチヨウの絵が描かれていた。

世界の何処であろうと、こんな姿をしている人がいれば土方優でなくとも会議を始めにくいだろう。

つつこみ所が多すぎて何処から初めていいのかもわからないという状態だった。

「おい、鬼崎！貴様は何でここにいるのだ？」

優は戸惑いを捨てて炎魔に話しかける。このままでは委員会議は始められない。

おまけにB組の委員長は生徒会長雷神アテネのはず。といつてもやらないわけで大抵は雪白が代理で来ていた。

今度は雪白すらおらず、かわりに生きた屍みたいな炎魔がいやがるのである。

しかし炎魔は泡をもっと吹き出し、それ以外何も反応しない。

「御機嫌よう、諸君。」

炎魔を無視して会議を強引に始めようと決心した時、北側の窓から元気な声が響いた。

そこには生徒会長がちょうど窓際から部屋へと飛び降りる姿があった。

この時に彼女のスカートは何故かめくれない為、もう学園七不思議に登録されている。

「さて、今週末の遠足についての委員会議を始めましょうか」

そんなことを言いながら指をパチンと鳴らし、背の高い豪華な王座が竜巻に乗って炎魔の隣に着陸した。

「その前に姫、」優はため息をつきながら、それでも状況を妥協してくれる人が来てくれて内心ホツとした。

「そいつをどうするの？察するに、お前が委員長義務をサボってそいつを代理に頼んだという所ね。」

「この私が委員長としての仕事を放棄するとも思う？」

アテネは心外そうな顔で言い、炎魔の前に置いてあるB組のリストを自分前へと寄せる。

「今まで委員会議に来たことが無い人の台詞とは到底思えないわね。」
土方優は呆れる。

「それはいいとして何で鬼崎がここにいる？いつもどおりに雪白さんに任せておけばよかったのに・・・そしてそいつは何でそんな状態なのだ？」

「だって動かないから芸術^{アート}するいいチャンスだと思ったのよ。」とアテネは何故かウキウキした素振で言う。

「白髪くんは土方先生、つまりあなたのお兄さんが作った教卓を壊しちゃって一時間もあの生徒指導室で過ごしたの。まさかあの土方先生にしばかれる馬鹿にいるなんて思わなかったわ。どんな話術や幻術、色気を使っても誰もあの先生を怒らせることをしてくれる人がいなくて残念と思っていたところなのよね。」

「全く、しかられたくらいで生きた屍状態に陥るとは、やはり男は情けないな。」

土方優は鼻息を荒くたてる。

一章から読んで下さってる読者の皆さんもつ気づいているとは思いますが、土方優と土方先生は兄妹^{きょうだい}である。

「で、そいつをどうするんだ、姫？」優は尋ねる。

「そろそろ飽きてきたし、起こしましょうか。」とアテネは清々しいほどケロリとした声で言う。

「でもどうやって？」と優は尋ねる。

アテネは何も答えずに優を自身と炎魔の間に立つように手合図を送った。

嫌な予感を感じつつも彼女はそれに従い生徒会長と炎魔の隣に立つ。その時、優の土方優の背中に針で刺された感触が襲った。彼女は

反射的に両手をその場所へと当てるがそこには何も無かった。
土方優は舌打ちした。

魔術師は大抵は一つの属性のエLEMENT魔術しか使えない。それは
遺伝子で決められている以上、他の属性の習得はありえないわけ
である。だが突然変異で二つの属性を扱える人もいる。

生徒会長、雷神アテネは雷と風のエLEMENT魔術を使うことが出来
る。

それが生徒会長の座を女であるにも関わらずに守ってこれた理由の
一つ、そして先ほどの針の刺すような痛みは彼女がちょっとした電
流で静電気を起こしたただけだけである。

「隙あり！！」とアテネは優の両手が後ろに回った瞬間に行動に移
った。

炎魔の手を取り、優の胸へダイレクトアタック！

簡単に言えば炎魔は土方の胸を触っている。

「何をしているかああああああ！！！！」

瞬時に赤くなつたものの、すぐに理性を取り戻した。

そして今度はよく昔話に出てくる鬼の金棒が土方優の手に現れる。

それを横に振りかぶり、アテネを当てようと横なぎに振る。

が残念ながらアテネはすでに頭を下げ、その猛攻を避けた。

金棒は椅子の高い背を壊し、そして物理法則に従いそのまま炎魔の
顔へと道を進み、攻撃は繋がった。繋がった。繋がってしまった。

「あの、委員会議をそろそろ始めませんか？」

D組の男子委員長が恐る恐るに意見する。

大参事は一瞬の隙から生まれる。(後書き)

主人公をつっこみ役と決めているのに今回は一度も喋ってないな。
どうしたものか・・・っていうか何か話が進まないXDDがはは

どんなに怖い女の子でも可愛い一面がある！！と男は信じたい！！

土方優は龍牙魔術学園の女子寮のある人物の部屋へと通じるドアの前に立っていた。

居心地が悪そうな顔を見るとどうやらその部屋へは入りたくないが入らなければいけないようだ。ちなみに、その部屋は彼女の部屋と同じに最上階である十階にあり、階段から一番離れた部屋、百十三番。

何を隠そう、この女子寮で唯一の異性、鬼崎炎魔の部屋である。

‘男粉碎の優’と噂されるほど男嫌いであり、異性とは最低限のコミュニケーションしかとっておらず、揉め事が起きればすぐに実力行使となり、男を必ず病院送りするまで叩きのめすのだから恐ろしい。

そんな噂と合致している少女とはあまり言い難い少女が鬼崎炎魔の部屋の前に立っている。

数時間前

「優ちゃん、後で鬼崎クンに謝っておきなさいよ。」

委員会議が終わわり、雷神アテネ、土方優、テュラエル・エンジェルダストは生徒会の雑務をしていた途中にアテネがそう告げる。

「それはどうしてだ？」と優は聞く。

「あんな精神崩壊寸前の状態の鬼崎クンにとどめをさしたのは誰？」とアテネ。

「あれは事故だ。避けなかったあいつが悪い。」彼女はそう切り捨て、また書類に没頭した。

「だったら胸をつかまれたのも、優ちゃんが避けなかったから優ち

やんが悪いという見方が出来ちゃうわ。」アテネは負けずに反論する。

二人は書類から目を離し、火花を散らした。

「そういうことになったのは元はと言えば姫がB組の委員長としての責務を果たさなかったからだろう。ちゃんとしていれば鬼崎も委員会議に顔を出さずに済んだ。そしてお兄様の罰も受けなかった。そうではないか？」

「あ〜ら？あたしはちゃんと生徒会室で仕事をしていたわよ、生徒会長としてね。それに生徒会ワンちゃんもとい雑務係の鬼崎クンにあのクラスをまとめることが出来るか試す良い機会だと思ったのよ。」とアテネは説明する。

「転校三日目でクラス委員として勤めを果たせる男はこの世にはいない。」優は負けじと返す。

「僕は中学で出来ましたよ？」今度はテュラエルまで会話に加わってきた。

「貴様に聞いていない、このローション変態！」と優は牙をむく。

「まあ、ともかく。生徒会室の壁に穴を開けて今はエルのお尻を振っている全裸の天使たちの絵がのってるハンカチで誤魔化さなければならぬ状況を作り出してしまった張本人として、風紀委員長土方優。生徒会ワンちゃん、じゃなくて雑務係に一言謝ってらっしゃい！」

とアテネは傲慢で満ちた声で優に命令する。

「一体なんのメリットがあってこの私が誤らなければいけないのだ？」

優は反発するが流れが生徒会長のほうへ流れていくのを感じ取り、食い止めようと抵抗する。

「そりゃ土方家から精神的&体的ダメージを食らえば誰だってどん底に落ちるわよ。決闘の時に開始前からすでに駄目オーラを發揮していたら意味ないの。行かないと今夜、優ちゃんの部屋に忍び込んでじゃうわよ うふふ。」

というやり取りがあり、結局行くことになってしまい、今の状況へと続いている。

どうやら優は決心したらしく手を髪にやり、ノックした。

部屋の中から、どうぞ、と声が響き、優はドアを開け、入った。

「うげっ！よりによってお前かよ。」

炎魔は部屋の真ん中に置かれている携帯用デスクに、優から見たら右の方から突っ伏しながらもこちらを向いていた。

彼のこめかみの上には漫画でよく見かける氷がいっぱい詰まったビニール袋を乗せていた。

今、彼の部屋にいる少女に金棒で渾身の力で殴られたのだから無理も無い。はっきり言えば雷神アテネの椅子の背の部分のおかげで力が半減し、こめかみにたんこぶ程度で済んだ。

「で？何か用か？」と炎魔は突っ伏しながら尋ねる。「サンドバッグのバイトは受付ねーからな。」

「ちょっと話があつて来ただけだ。」優は歯軋りをしながら言う。

「今日の委員会議の時についてだ。」

「何かあったのか？」炎魔は聞く。

優は携帯テーブルまで歩み寄り、正座した。

「今日は・・・その・・・あれだ・・・」もじもじしながら言うべきことを言えずにいた優。

がその動作のせいで微妙な空気が出来てしまい、そしてそれはさらに緊張感を生み出した。

「あ・・・・・・・・・・・・」

優は何故かどンドン緊張してしまい、頬が紅くなり、声まで発することが出来なくなっていた。

炎魔と言えば顔はまだテーブルの表面にべったりとくっつけたままで彼女を不思議そうに見つめる。

「すまん!!」と優は立ちふさがる壁を乗り越え、言うべきことを言い、頭を下げた。漆黒の髪がダム決壊のようにテーブルに垂れ下がる。

しばしの間、沈黙が流れた。

「は？」炎魔の顔に困惑が浮かんだ。

「だから今日、巻き添えで金棒で殴ってますまん!!」優はもう一度誤る。

「なるほど、」炎魔は納得する。「このたんこぶはその時出来たのか。」

・・・・・・・・

「へ？」今度は見上げた優が困惑した。

「いや、実は土方先生が俺を生徒指導室に連れ込んだ後の記憶がなくてな。気がついたらもうこの部屋にいてな、林さんが俺の顔に油性のマジックで落書きしようとした所だったんだ。」

「……………」

優は自身の中で何か崩れ去っていくのを感じた。

「しかしその後委員会議で俺を金棒で殴ったのか。たんこぶだけで済んだのはおかしいけどまあ、いいか。しかし、律義にも謝りに来るとは。お前も女の子らしくかわいい一面あるじゃねーか。」
炎魔は場の空気がよどんでいるのを気づかず話し続ける。

そして……

「このトウヘンボクがああああああああ！！！！」

優は怒りを爆発させ、炎魔に目潰しを食らわせた。

「ぎゃあああああああ！！！！目がめがあああああ！！！！」

そう叫びながら炎魔は目をおさえ、床をごろごろと回り始めた。こめかみの上に乗っていた氷袋はもちろん一緒に落ちてその冷たい中身を床にぶちまけた。

土方優はすでに炎魔の部屋から脱出しており、隣にある自分の部屋

に非難した。

ふんべらばああああ、つめてー！！！！と隣から炎魔の悲鳴が聞こえる。

優は身をベッドに放り込み、朱色に染まった自分の顔を枕に埋め込んだ。激しく打つ脈と共に鬼崎が言った言葉が頭の中から離れず、響いた。

お前も女の子らしくかわいい一面あるじゃねーか。

どんなに怖い女の子でも可愛い一面がある！！と男は信じたい！！（後書き）

残念ながら筆者は なので女の子の思考はよくわからないのですが
ありえそつじやねっつー感じで書いてみました。

相変わらずしょうもない話で女の子がメインに暴力振ってるってど
うよ？

決闘をすっぱかす主人公ってどうよ？（前書き）

久々の投稿です。

決闘をすっぱかす主人公ってどうよ？

決闘。

それはどんな時代だろうと、どんな世界だろうと変わらずにカッコいい響きとカリスマを供えた言葉だ。

人間はあらゆる理由で決闘をする、プライドを保つため、女のため、男のため（？）、おやつのため、人を守るため、信念を貫き通すためなどなど数え上げたらきりが無い。

動物もテリトリーのためや雌のために決闘をする。

そして人間は他人の決闘を見る事を好む。自分たちには全く関係ないはずなのに熱くなり、応援する。

今日、龍牙魔術学園で決闘が行われる。

それは学校のホームルームでさえ見に行くように言われ、大所帯となっていた。

決闘場所である中庭にはなんとレンガ造りのコロシウムが地面をハッチみたいに開けて出てきたのだ。

コロシウムは丸い闘技場に階段のように段々と上がっていく感じの観客席があり、一部のスペースにはでかい画面が設置しており、誰でも見えるように工夫されている、さらにその画面の下には中継場所があり、ゲストに決闘をコメントしていただくと言う形になっている。

決闘時間四時に近づくとつれて観客である生徒たちがドンドン入ってきて賑やかになり、決闘を待った。

ふさわしい決闘場、満席に近い観客数、スタンバイしている放送と新聞部にゲスト、そして闘技場で生徒会執行部が来る勝負に備えている。

日本刀に刃こぼれがないか白い胴着とはかま姿で調べている土方優、「戦場の哲学」と言う本を熟読しているテュラエル、そしてビーチパラソルの下でLehneに気持ちよさそうに座ってジューズを飲んでいる生徒会長雷神アテネ。
だがここでもとても大切でなくてはならない者が無かった。

そう対戦者、すなわちこの物語の主人公である鬼崎炎魔がまだ来ていない。

あと決闘開始まであと十分切った時点でもまだ姿を現す気配が無い。

「バックラレましたね。」テュラエルはアテネにジューズを注ぎながら言う。

「そうね。」アテネはため息をつく。

「どうする、姫？」優はこめかみに青筋を立てながら尋ねる。

アテネは何も答えずに生徒手帳を取り出し、プレートに触れた。

ポンっという電子音が鳴り、画面から立体映像が飛び出した。色んな名前が飛び出ていてアテネはスッポカシ主人公のフルネームを言うと彼のパーソナルデータが現れた。彼女は炎魔の写真を押すと電話音が流れ出したそれを耳に当てた。

この生徒手帳はこの学校関係者にしか使えないが、ただで電話し放題の上、ショートメッセージやテレパシーモードに移行出来たりする優れものなのだ。

しばらくすると「もしもし？」と炎魔が電話(?)に出た。

「鬼崎クーン、今どこにいるのかな？」アテネはニッコリしながら答えたが目は全く笑っていなかった。

「何処つて、俺の部屋だけど？」炎魔は怪訝そうな声で言う。

「何で自分の部屋にいるのかな？」アテネの笑みは広がったが目は笑っていないので逆に不気味さが増した。

「アレだよ、明日一泊二日の遠足だから準備しようと思った。」

「ひよつとして今日決闘あるのお忘れ？」

「え？あれマジでやんの？」

「今日のホームルーム聞いてなかったの？」アテネの額に青筋が立ち始めた。

「いや、寝てた。」

「五分以内に来なさい。」と女の子とは思えない凄みのあるヤクザ声でそう言う。

「片道十五分を三分の一の時間で来いだと？いいか、ひめっち、世の中にはな出来る事と出来ない事がある、そしてその申し出は後者だ、分かるな？オマケにその決闘、承諾した覚えがない。というわけじゃーな。」

炎魔はそういつて電話を切ろうとした。

が世の中は残酷だ。

「土方先生。ちょっと来てくれますか？」とアテネは作り笑顔で担任に呼びかける。

「スイマセン、チョウシコイテマシタ、三分で来ます！！」

カッーン！！

金曜日の四時、決闘の始まりを告げる鐘が学園コロシウムに響き渡った。

「レディースあーんどゼントルメーソ、今日は待ちに待った決闘です！！今日の決闘は生徒会の皆さんが最近転校してきた鬼崎炎魔に制裁を加えるというものです。」

中継場所から元気な赤毛の女の子が司会をしている。彼女の隣には三人のゲストが座っていた。

「司会はこの私、鳳凰光、一年C組が勤めさせていただきますーす！

そして今日ゲストとして来ていただいたのは鬼崎さんの暴行の被害者である高橋葉子さん（たかはし ようこ）、なんと顔に膝蹴りを食らってしまった。今日は悪口コメントを楽しみにしています。

一人目のゲストは雪白を虐めていたグループのリーダーっぽかった猫耳でもあるかのような金髪。キリつとした顔つきだったがいまはでかい絆創膏が鼻頭に付いており、美貌が台無しだった。女子から人気あったのかコロシアムにいる炎魔に向けてブーイングが巻き起こった。

「次のゲストは龍牙魔術学園の女子寮を束ねている林さんです。」
「どうも」という気の抜けた声の主が挨拶した。

「そして、最後のゲストは先頭解説アンドなんとわれらが学園長、松平龍一郎さん!!!」

会場にいるすべての生徒が拍手を送り、中には立つものまでいた。かなり人気であることが伺える。

「では早速決闘者の紹介に移りましょう!!!赤コーナーには生徒会メンバー風紀委員長土方優さん!!!別名、男粉碎の優、!!!」
ここではドツと女子からの拍手と声援が巻き起こった。が男子からはそれに負けないブーイングが鳴り響いた。

「生徒会秘書、謎の留学生テュラエル・エンジェルダスト君!今日もまた新しいローション技を披露してくれるのか?あ、やんなくていいよ。」

テュラエルには数人しか拍手しなかった。新しいローション技を披露しようとして上半身裸になっているのだから無理もない。

「そしてわれらが生徒会長、雷神アテネさん、通称、姫!!!先代生徒会長の野望を打ち砕き、一年で生徒会長になったこの人に盛大な拍手を!!!」

今度は女子全員が立ち上がり拍手と声援が巻き上がり、闘技場にバラを投げ込む。

一方男子は何もせずに黙っていた。

「そして最後に不良の転校生、鬼崎炎魔!!! 転校初日にクラスメイトをボコリ、女の子の顔に膝蹴りを決め、女子寮で覗いて、そして土方先生が精魂込めて作った教卓を破壊した張本人!!! そしてなんのつもりか地面に手を付いている、そしてもう虫の息だ!!!」
ここで初めて全員がブーイングを炎魔に向けて飛ばした。

が彼はそんなものには耳を傾けなかった、というより四つんばいになってぜえぜえと荒い息をしている炎魔にそんな余裕すらなかった。歩きで十五分の道を本当に三分で走ったのだから当然疲れる。

「ではまずルールをせつめいします。」司会者の鳳凰光は説明し始める。

「まずはここの中継場所にあるルーレットで勝負方法を決めまーす。まあ、いろんなのがあるから楽しみにしといてね。もちろん全部一対一、もし鬼崎くんが一勝でも出来たら彼の勝ち! そして出場者は持てる力すべてを使って戦ってください。終わったらゲストの皆さんが審査員として判定を行います! いいですか? ではルーレットスタート!!!」

そついうと中継場所の上にある画面が付き、画面は文章で埋め尽くされた。

そしてそれらが渦のように動き出した。

炎魔はルーレットを見守りながら立ち上がり、祈った。

ローション相撲だけはやめてくれ、と。

決闘をすっぱかす主人公ってどうよ？（後書き）

いや、決闘をすっぱかす主人公ってあまりいませんよね。
われながら変なことを考えたものだ。

女の子と決闘ってなんかおかしくね？（前書き）

久しぶりの投稿です。

今受験中で書く暇が殆んど無いのでおそくなっちゃいましたね。

女の子と決闘ってなんかおかしくね？

チーン！！

「決まりました！！」抜刀皿割り対決「です、イエア！」と司会者の鳳凰は告げ、拳を突き上げる。

コロシウム会場の真ん中に二つの小さい四角形が開き、その穴からゆっくりと鞘に納まった刀と長い紐にくくり付けた白い醤油皿がセツトが二つずつ出てきた。

「ルールは簡単、対戦者は体の何処かに皿をつけてもらい、ほつとうがたな抜刀刀でそれを割りあって貰います。サポート魔術はオーケーですけど相手に直接攻撃系統は駄目です。」

炎魔はここでようやく立ち上がり備品を取りに行き、その場で装着した。ちなみに制服ではなく軍隊の迷彩服のズボン（タイガーストライプ）をはいており、蒼いT・シャツの上に袖に赤いダンダラ模様がついてる黒い羽織を着ている。

一方、生徒側では（炎魔も一応生徒会一員なんですけどね）……

「誰が先方の役目やる？」とアテネは金髪の前髪を整えながら聴く。「っていつか直前で決めるような事じゃないわよね。」優は呆れながら言う。

「刀にローション塗って良いなら僕が出ましよう。」とテュラエルが提案する。

「一体なんの目算があって神聖なる刀にネズミのゲロをつけようとしてるんだお前は！？」と優は青筋を立てる。

「ネズミのゲロとは失礼な！滑る刀を使えば相手も確実に滑ります、すべるだけに。」

「全然上手くないわよ！！！」

と生徒会が不毛と下品をミックスさせた会話を盛り上げてる所に炎魔は皿を自分の胸の真ん中に設置し終わり、刀を鞘から抜き点検していた。

刃は立派に見えたが全く切れないように作ってあった。

炎魔が刃を太陽に輝せ、眺めていた途端、刃が消えた！

「おい！刀が消えたぞ！なんの嫌がらせだ？！」と炎魔はシャウトした。

「あゝっと、言い忘れてましたけど、抜刀皿割り対決の名前であり、抜刀術だけで戦ってもらいまゝす！」と鳳凰さんがぺろって舌を出しながら説明足した。「だから刀の刃も抜いた数秒後消えちゃいまゝす、さらに物理的ダメージは与えないように出来てるからだから体を透き通るけど刃同士はぶつかるから気をつけてねゝ。あと体を透き通る時は結構痛いからねゝ。さらになんと、皿はその刃でしかこわせません。オゝグレイツ！」

「えっ？それじゃあ一太刀しか出来ないってこと？しかも俺は結局何も出来ないじゃん！どうしてくれんだー？！」

「あ、そんなことないよ。また鞘に入れたら元に戻るからまた抜刀術が出来るから安心してゝ。そしてこのボタンをポチツとね。」

中継場所では何かを押したのかロシアム会場が青白い半球に包まれたかと思つとそれはいきなりスウーと消えた。そして会場の真ん中の上空にサッカーボールぐらいの大きさの緑色の火の玉が現れた。

「えゝ、今観客のご安全のために会場の周りにシールドをはりました、ちなみにあらゆる生物侵入を拒むので出来れば触らないでくださいゝ。それとおにぎゝゝ。誰かが直接攻撃魔術を使用した時にはそこに浮いてるドレインボールに吸収されるようになっていまゝす。」

「おい！今明らかに俺が不正するような言い方だったよな？！星屑にしてやるうか？！」

「不良転校生からコメントをいただきましたので今度はゲストの皆さんに伺つていまゝす。高橋さん、今日の決闘で何が期待できるで

「しょうか？」

「へっ、あの卑怯者が負けるに決まってるんだろっが。生徒会役員共はこの高橋葉子さまよりは弱いけどよ、あんな姑息な白髪ヤロウに負けるはずが無い。」と可愛い顔をしながらヤンキーのように暴言を飛ばす高橋葉子、この物語には性格悪いのが多いな。

「と一発でノックアウトされた女子不良団の頭、高橋葉子さんでした。ではお次は林さんです。彼も一応女子寮で寝ているという噂がたっていますますがその所はどうなんでしょうか？」

「ああ、いるよ。」と林さんは眠たそうに答える。「一目目なんか女の子のシャワーシーンを覗いて大変だったよ。」

「いや、誰のせいだよそれ!!!」と炎魔はキレるがそれよりも男子観客のほうからの批判とブーイングが爆発した。

「ためえ、うらやましいぞ!!! いますぐに死ね!!! この裏切り者が!!! うっせえ、俺のせいじゃねーよ!!! この変態が!!! 男の敵!!! 写真撮ってくれるか!!!? 切り刻んでやるぞ!!!」

「え、ブーイングが止みませんが構わずドンドン行っちゃいましょう。ではラストは我が学園長に飾ってもらいましょう。ドンドンパパー。」

「うむ。鷲も生徒会役員共が勝つ可能性は高いと断言するう、が鬼崎炎魔も勝つ見込みも十分にある。彼の力がどんなものか正直楽しみだあ。」

「おとつと、中々興味深いコメントですね。では生徒会の皆さん、そろそろ決めていただかないと始まんないんで。」

「しょうがないわね。」アテネはため息をつく。「優ちゃん、いつてらっしゃーい。」

土方は何も言わずに会場の真ん中へ歩き、長い漆黒の髪をポニーテールにし、皿が額に来るように布を鉢巻のように縛った。そして彼女の準備が終わったあと、設備がまた地面の下へと潜った。

「で、は、準備も整った所でそろそろ勝負を始めたいと思います。ではまず握手を。」

土方優と鬼崎炎魔はたがいに歩み寄った。優はすぐに手を差し出したが炎魔は少し躊躇い、ゆっくりと手を伸ばした。

「手加減はいらない。本気で掛かって来い、いいな。」と優は炎魔を睨む。

「お前も怪我をしたくなかったら本気を出すこつた。ちなみに負けたほうは勝ったほうの言うことを一日だけ聞くってのはどうだ？」と炎魔も負けじと切り返す。

「おもしろい。その条件飲んでやろう。その場合は女子寮のトイレを道具なしで掃除、そして私のシャワーを治してもらおう。」

「へっ、だったら俺が勝ったらお前は女の子らしい格好で俺と一日デートだ。」

「ふんっ、男は何時も下らん要求ばかりする。二度と女の子に近づけないように貴様にトラウマを植え付けてやる。」

「なら俺はお前をねじ伏せて、俺は強靱、無敵、最強！」って宣言してやるぜ。」

「おっつと、すでに二人は火花を散らしています。どちらも負けられない勝負がいま始まります！ではレディ、ファイ！！！」

女の子と決闘ってなんかおかしくね？（後書き）

っていうかまだ決闘始まってないし、おまけにもう十六章なのにまだ一週間も立ってないなんて・・・俺どんだけ文章力無いんだ？？！

人生は計画通りには行かない！！

そして決闘開始の鐘がカーンとなった。

次の瞬間、両者はパツと距離を取った。

土方はすぐに刀を腰に納め、右足を前に出し、右手は体の前にぶら下げ、半身で抜刀構えに入った。

鬼崎も半身に構えたが刀を腰に据え、右手は柄をつかんだままだった。

二人ともそのままじつと動かなかった。

コロシアム全体が緊張感に包まれ、観客のほうからは針を落とす音すら聞こえるほど静かで展開を噛み付くように見守った。

静かな風が会場に吹き、優の長いツヤツヤでサラツとした漆黒の髪を揺らした。整った気品ある彼女の顔には集中力で刻まれていて、優しそうな茶色い眼差しは真剣そのものだった。

一方、炎魔の表情から何も読み取れず、そして眼も一ミリも動かさずまるで石の彫刻のように立っていた。唯一ツンツンした白髪が風に揺れていた。

二人は動かずに時間だけが伸びるようにゆっくり進んでいった。

さらに緊張感がドンドン高まり、あちこちで唾を飲み込む音がすかに聞こえた。

チロツチロリ〜ン

何処かで携帯電話が鳴った。

次の瞬間、土方と鬼崎が飛ぶように走り出した。

そして両者、抜刀した。

数秒後、二人の決闘者は互いに通り過ぎていた。

優の額にある皿と炎魔の胸に付いている皿はどちらとも無事だった。が炎魔は苦虫を噛んだ顔で左肩を押さえた。

「あーっと、両者の皿は無事ですがどうやら鬼崎選手は一太刀もらってしまったようです。ちなみに解説の学園長先生、一体何が起こったのでしょうか？二人とも十六とは思えないくらいに早い上、このロシアムが広すぎて我々は遠目なのでよく見えません。」

「うむ、」松平は咳払いをして説明し始めた。「まずは風紀委員長土方優視点から語ってみよう。まず彼女は全部で三太刀を振るった。一太刀目は鞘から刀を抜き右薙、つまり右脇を切った。二太刀目は右薙の勢いを利用し、その場で一回転しながら刀を上から下へ切り下ろし、そして三太刀目は相手を飛び越え、空中で後ろから切った。」

「お、それはすごいですね。」会場も鳳凰光と同じく感服する。

「そうじゃ、さすがは第三最強剣術で謳われる『令桜撃流』の道場の長女じゃ。しかしその三太刀を受けても自分の皿を守りきった鬼崎炎魔も中々の手馴れじゃ。」

「まあ、でも当たっちゃったみたいですけどね。」と司会者は意地悪そうに言い、隣の高橋はガッツポーズを取った。

「ちなみに鬼崎炎魔は土方優の最初の一太刀を同じような右薙で止めた。だが回転して上から来る刀が受け止めることは出来なくて咄嗟に体をずらし、皿への直撃を避けた。そして後ろからの一太刀を鞘で受け止めたのじゃ。」

「あんな遠くから見えんのかよ、すげえ爺だなうちの学園長は。」

炎魔は左肩を揉みながら立ち上がり、優の方へと向いた。

「松平学園長を爺呼ばわりするな、一応貴様も生徒会の一部だろうが。」優は呆れながらも炎魔を見下ろす。

「それにこの程度の技でもう当たるとはな、これはまだほんの小手調べだぞ、鬼崎。まあしょせん貴様は男だからな、弱いのは当たり前か。」

「へっ、俺に一発当てられても、皿を割ることも出来ないんじゃないか？」
お前の流派も大した事ないな。」

「貴様、そんなに死にたいのか？」と優は目の元が濃くなり、阿修羅のような顔に変形していく。

「やれるもんならやってみろ！」炎魔は挑発的に言くと黒いオーラが発ちはじめた。

「お前に見せてやる、闇の力をな！」

そう宣言した後、炎魔は黒いオーラを纏いながら刀身がない刀を鞘に収め、優へ向って突進した。

優は反射的に刀を鞘に収め、身構えた。

そして猪のように突進してくる炎魔に刀を抜き、切るのではなく突きを放った！

が炎魔はそれを見切っていたかのように大きく跳躍して優を飛び越えた。

彼女はすぐに振り返って、来るであろう斬撃に備え防御の構えに入った。

だがそこには炎魔はいなかった。

辺りをキョロキョロ見渡しても彼はどこにもいなかった。

不安が土方を襲った。さっきまでいた男が急にいなくなったのだから当然ではある。でも何時もと違うことは不安がまるで成長しているようにドンドン大きくなっていくことだった。

その不安の成長は留まることを知らずそれはやがて恐怖に変わった。優は感情を外を漏らすまいと必死にこらえていた。だが今度は恐怖

までもが膨らむ風船のように増していった。

冷や汗が顔から滝のように流れ、恐怖で気が狂いそうだった。

彼女の恐怖が限界を達し、叫び声を上げて勝負を放棄しようと思っ

た。
彼女が固まっている間、後ろに伸びている影の真ん中から白いツンツンした髪が生えてきた。そしてその白髪のとから頭が続き、全身が続いた。

そこから音も無く現れたのは鬼崎炎魔だった。
会場がおおーと驚きの声を発したが優の耳には何も届かなかった。
炎魔は早く終わらせようと刀の柄に手をやった。

その途端、空から大きなトラックの三倍の大きさがあるようなコンテナが落ちてきてコロシアムの真ん中にバカンツと鉄と地面が衝突する音と共に着陸した。

もう精神的に爆発寸前だった優はおびえた動物のようにビクッと反応した。その際に持っていた鞘が急に上がり、炎魔の股間にクリティカルヒットを達成した。

「っっっっっっっ」

炎魔は声にならない悲鳴を上げて泡を吹き、（？）地面に倒れこんだ。

それに追い討ちをかけるかのように落ちてきたコンテナが爆発し、辺りを一瞬照らした。

光が消えた後、コンテナの壁は地面に落ちておりまるで上手に開けたプレゼント箱のようだ。

そしてその中からは・・・飛竜が咆哮しながら立っていた。紅く硬い鱗に覆われた体、全長30メートル、野生に満ちた黄色い目、偉大さを感じさせる翼、そして人間を串刺しに出来そうな闘牛のような角が四本。

嘘だろ、と炎魔は心の中で呟いた、今日は命日か？

人生は計画通りには行かない！！（後書き）

やっと闇の力を使った主人公！

でもすぐに股間やられるってなんかベタだな、すいません！！

人助けに失敗するほどかつこ悪いものは無い!!!

突然の飛竜の登場でコロシウム全体が呆気取られてしまった。

誰もが決闘に夢中になってしまい、コンテナが何処から落ちてきたのさえ分からなかった。

そしてコンテナが壊れるまで火を噴いた飛竜は自分を閉じ込めていた入れ物の瓦礫を踏み潰しながら炎魔（まだorz中）と優がいる方に向って翼を広げ、咆哮した。

そこで何処からも無くアラームが鳴り出した。

「飛竜探知！シールド強化マックス！」と機械的な声が響いた。

観客を守る青白い半球の上に浮かんでいる緑色の玉が赤に変わり、半球も薄い紅色に変わった。がこの声で生徒たちは現実に引き戻され、観客席はパニックに陥った。

「しずまれえええ!!!」

どでかい松平学園長の声が津波のようにコロシウム全体に渡り、パニックを一蹴してしまった。

「お前らは子供とはいえ、誇り高き魔術師だ！飛竜の出現で取り乱すではない！！こういう時にこそ精神を乱すな！こんな事を対処出来ないのであればお前達は凡人とは何もかわらぬのだぞ!!!」

その言葉に生徒たちははっとしてそして何事も無かったようにまた席に着いた。

「あの松平学園長先生！」司会者の鳳凰光が松平学園長の羽織の裾を引っ張った。

「のんびり構えていないで生徒会の皆を助けてくれませんか？」

「そうしたいどころじゃが残念ながらそう簡単にはいかん。」

「それはどうして・・・」

「シールドが最高に強化してしまったのじゃ。まあ驚なら拳の三発で破壊できるが、そうしたらシールドそのものが崩壊してしまのじや。生徒の安全を危険にさらあすわけにはいかない。」

「でも生徒会の皆も生徒だよ?!」と光は声を上げてしまう。

「わ、分かつておる。とりあえず、控え室から中に入ることが出来るから急ごう!」

生徒全体には遠目なので見えないが学園長の目はめちゃくちやに泳いでいる。だが先ほど説教しておいて学園長である松平がパニックでしまったら取り返しが付かない状況になりかねない。

飛竜がまたしても咆哮した。シールドが薄紅色になっていて外も中もはつきり見えるがコロシウム戦場は少し赤く染まった。そのせいで飛竜は何故か怒りで反応し、その黄色い眼は炎魔と優を捕らえた。そして彼らに向って飛ぼうと翼を広げた。

が広げられた翼には翼膜が切り取られていた。それでも飛ぼうと飛竜は飛ぼうと試みるが一ミリも上がらず、その代わりに血が飛び散った。切り取られた翼膜からこみ上げてくる痛みに飛竜はまたしても咆哮した。空に向って咆哮している最中、口の中に火が集まり始めた。

そして顔を炎魔達の方へ向けると同時に火の玉が飛竜の口から飛び出してきた。

「アブねえ!!」

炎魔は（股間からの）痛みには耐えながらいつの間にかその場にペタンと座り込んでしまった優を蹴つ飛ばそうとした。彼女の中の強大な恐怖がまだ消えていないことを知っていて、そのせいで動けないのを知っていたからだ。

が何かに当たり、横に逸れてしまった。そのせいでバランスが崩れてしまい、倒れまいと必死になっていたら優の前に庇うように、そして飛竜に背中を向けて立っていた。

そこに火の玉が炎魔の背中に炸裂した。

炎魔は鼓膜が破れそうな爆発音と共にその場から吹っ飛んでしまった。が火の玉に当たったにもかかわらず、炎魔の服は燃えていなか

った。

そして落下地点で何かにぶつかり、炎魔の視界は赤に染まり、嗅覚はバラの臭いに包まれ、そして顔全体になんともいえないやわらかい保養感が伝わってきた。

彼は一瞬そこで寝てしまおうと考えたが飛竜がいるところで寝られるような神経を持ち合わせていない、オマケに顔が一体何処に突っ込んでいるのかは薄々感づき始めた。

掌を地面に当て、自身を押し上げた。

そして顔をアテネの包容な胸の谷間から上げた。

「鬼崎くん。」アテネはニツコリ笑う、顔だけ。「私って、子供のころから知りたいことがあったのよ。」

「そういう時には百科事典をオススメするぜ、一冊千三十円。」炎魔も笑顔で答えるが冷や汗が滝の様に噴出し、顔も蒼白になっていく。

「昔、ポケンってゲームがあつてね、」素晴らしいながらアテネはすらっとした右手を拳に固める。「そこで、かみなりパンチって技があつたの。」

「なるほど。」炎魔はそう言う。来るべき展開を予想して・・・

「アレを現実をやつたらどうなるのかなーって試してみようと思うの。」彼女の拳には電撃が迸る。

「そいつはいい考えだ。今、後ろに飛竜がいるからそいつに試してみたらどうだ？」

「い・や・よ！」と最後の「よ！」で電流が迸る拳が炎魔の額を襲った。

しびれる電流に鉄にさえ穴を開けそうなパンチ。視界が真っ暗になった炎魔の心に浮かんだ言葉は一つ。

超いてえ・・・

今度は逆方向に飛ばされたが先ほどの爆発より飛距離が長くなっており、優を襲おうと歩みだした飛竜の顔に炎魔は叩きつけられてしまった。

驚いた飛竜は少したじろぎ、炎魔を振り下ろそうと頭をブンブン振る。しかし残念なことに炎魔の派手な赤いダンダラ模様の黒い羽織が後方に向って生えている数本の角に引っ掛ってしまい、取れない炎魔も額の痛みが尾を引き動けない上に振り回されていてはどうすることも出来ない。唯一羽織を何とか脱ぐことは可能だが彼にはこれを脱ぎたくなかった。

不幸主人公が振り回されている最中・・・

「エル、今すぐ優ちゃん抱えてを控え室に行きなさい！そしてここを完全に封鎖しなさい。」

アテネは赤いセーラー服から砂を叩きながら立つ。

そしてテュラエルの左手からなにやら白い光を放つ丸いものが現れた。それを鞭を使うように振ると白く光る玉は触手のように伸びて優の方へ跳んで行った。

白い触手はまだ座り込んでいる彼女に巻きつき、そしてテュラエルが左腕を後ろに回し、それに交合するように優が触手に運ばれテュラエルの腕にお嬢様ダッコで収まった。

土方優の回収が終わった金髪少年は生徒会長の後ろにあるドアに駆け寄り、コロシウム戦場から出た。

「会長、あなたも早く！」とテュラエルは急かす。

「私は残るわ。」とアテネはとんでもない事を言う。「早くドアを閉めて中からシールドによる完全封鎖をしなさい。」

「そんなこと・・・」

「あら、あなたも、かみなりパチ、食らいたいの？」

アテネはそういうと右手にまた雷を溜め始める。そして風を操り、まだ開いているドアを強制的に閉めた。

テュラエルは苦虫を噛み潰したような表情でドアの隣にガラスの中に設置してある「緊急」と書かれた赤いボタンに銀色の眼を向けた。そしてため息をつきながら拳でガラスを貫通し、赤いボタンを押した。

テュラエルがボタンを押した後、コロシウム戦場を包むシールドが一回緑に光り、コロシウム戦場の壁にシールドが伸びるように張られた。雷神アテネと鬼崎炎魔に逃げ場が無くなった。

人助けに失敗するほどかっこ悪いものは無い！！！！（後書き）

いや、どうなるんだろうね？

タッグを組むか、それとも仲間割れして食われるか！！！！

自分で言うのもだけど展開がベタだな、おい！

男は女の子のためならがんばれる！！（前書き）

地震で被害に会った皆さん、俺には出来ることは全くありませんが
この物語を読んでくださってる皆さんを元気付けることが出来れば
本望です。

どうかがんばってください！！！！

男は女の子のためならがんばれる！！

アテネは深く息を吸い込み、心の中で状況のおさらいをした。

決闘中に何故か飛竜が乱入、そしてコロシアムの自動緊急装置がシールドをMAXに強化し、優チヤンは精神的にノックアウトされ、そしてエルはコロシアム戦場を優と出て封鎖した。

そして私は今は飛竜と一つの空間にいる・・・その飛竜は今鬼崎クンを振りほどこうと必死に振り回してるけど何で取れないのかしら？まあ、少なくとも鬼崎クンが振り下ろされても役には立たないでしょうね。一緒にやっちゃってもいいかな？

そこまで考えた（一秒で）アテネは手刀で飛竜に向かって風による斬撃を放った。

風は彼女と飛竜の距離を軽々と縮め、暴れている爬虫類の顔に当たった。

血飛沫が飛び散り、飛竜は血が凍るような絶叫を上げた。

そして服が破れる音と共に炎魔はやっと飛竜から離れることが出来た。

彼は顔面から地面に落ち、余った勢いで砂だらけの地面を滑り、アテネの隣でようやく停止した。

飛竜は右目を風に斬られ、痛さのあまりにあちこちに火を噴き、暴れている。

そしてまだ見える左目でアテネを睨みつけた。飛竜は人間ほどの知能を持つてはいないが金髪の少女がその右目を潰した張本人であることを悟ることは難しいことではない。事実、飛竜は種類によって差はあるが動物の中でも上位を争うほど賢い。

オレンジ色の光が飛竜の口から漏れ、そして次の瞬間、大の大人の大きさの火の玉が発射された。

右目を失ったせいかわ、アテネへと向けた火の玉は彼女の2メートル前で地面に当たり、爆発した。

爆風でアテネのスカートがめくれるかと思いきや、ギリギリの所で留まり、パンツは見えずじまいだった。生徒会長のスカートはどんな風でもめくれないとは学園の七不思議に仲間入りしたのもつい最近。

爆風で目にゴミが入らぬよう、アテネは腕で目を塞いだ。

だがそれは大きな過ちだった。

飛竜はすでに外れると知っていたのか、火の玉を発射直後にアテネとまだ地面に落ちている炎魔へ突進した。

アテネが腕を下ろした時にはもう後五メートル近くまで接近していた。それに驚いてしまい、風の防御壁を築くための時間を失ってしまった。悲鳴や逃げることも出来ず、生徒会長は目を瞑ることに出来なかった。

そして7トンもある巨体が直撃し、飛竜の頭は壁に激突した。

アテネはフワッと浮遊感を感じた。

「えっ？」と戸惑い、目を開けた。その蒼色と緑色の眼に映った蒼白な炎魔の顔に胸が少し高鳴ってしまった。どうやら炎魔はアテネを危機一髪、お嬢様抱っこして飛竜の突進から救ったらしい。

「あゝ、危なかった。危うく死ぬところだったぜ。」と炎魔はコメントし、アテネをおろした。

「まさかあいつがあんなずる賢いとは思わなかったぜ。本来なら飛びながら狩る生き物だから地上では雑魚かと思ったら大間違いだったな。あ、でも突進でぶつけたせいで今目眩してる。」

「どうして？」とアテネは訪ねる。

「そりゃあんな勢いをつけて壁に衝突すりゃ目眩ぐらいするだろ。」
「じゃなくてなんで私を助けてくれたのかを聞いているの。確かに私も一応ピンチだったから一応助かったかもしれないけど鬼崎くんは地面に寝転がっていて一人で逃げればよかったんじゃないの？」
炎魔はガシガシと頭をかく。

「ど、どうでもいいじゃねえか。」照れた風にそっぽ向く。

「あら、お・し・え・な・さ・い？」

アテネは後ろから炎魔に飛びつき、抱きしめる。

「ぬお！何してんだオメー！？」炎魔は驚き、顔が次第に赤くなっていく。

「ビハインド・ハグよ、早く教えてくれないとコアラのように鬼崎クンにしがみつくわよ。」とアテネはウキウキしながら言う。

「だー、お、お前が死ぬのが嫌だったただけだ！これでいいだろ、頼むから降りてくれ！！」

「あ、赤くなつて照れてる照れてる、もー、可愛いわね？。」そこでアテネはにこやかな笑顔でようやく降りた。

「飛竜があともう少しで目眩から復活する、何かあいつを倒す強力魔術使えない？」顔が未だに真つ赤な炎魔は尋ねる。

「使えないことはないんだけどチャージするのに二分はかかったちゃうの。」アテネは前髪をいじりながらため息をつく。「私もまだまだ未熟者ね。」

「全く使えない俺は何なんだ？カスか？」炎魔は頬を引きつらせる。強力魔術は高校三年になってようやく習うもので一年が出来るはずがない。

それどころか強力魔術は大方、法律で禁じられているため、教えない学校すらあるほどだ。

「鬼崎クンはゴキブリよ。ま、強力魔術は生徒会長のたしなみよ？」

「カス以上、犬以下、ゴキブリと同等か、なんか俺の中の何か大切なものが壊れそうだ・・・つーか生徒会長どうやってなったんだ？たしか生徒会長選挙は生徒手帳によると、十月の初めにやるもんじゃなかったのか？」

「蹴落としたわ。」アテネは胸を張り、いばるように言った。「なんか、いちやいちゃハーレム計画」を立てていたからそれを生徒会副会長だった私が暴露して退学にしまったわ。」

「おっそろしい事すんなお前！！しかもどっちが悪役だかわかんね

「！つてか、いちゃいちゃハーレム計画、つてなんだ?!」炎魔は異性の恐ろしさを感じてしまった。そして生徒会でこの金髪ポニーテールクールビューティーの下で働かなければいけないと思うと先が思いやられた。

「なんか制服をミニスカに変えるとか、男の子一人に女の子二人は付き添わないといけないとかそんな下衆が考えるような計画だったわ。学園長の頭の固さおかげで殆んど案は通らなかったけど。唯一成功したのはスクール水着をあのおたくが萌え!」つていうようなあの古臭いやつになっちゃったわね。」

「結局それだけ変えて退学になったのか、少し不憫だな。ま、俺はミニスカ嫌いだから別にいいけど。」

「そうね、ミニスカだと女の子のスカートがめくれなくなるから困るのよね。」

「お前がめくつてんじゃねー!!」炎魔は突っ込む。何故、女の子であるアテネが他の女の子のスカートをめくりたいのかが理解できなかった、というか理解したくなかった。

「お姫様のたしなみよ?。さて、おしゃべりはここまでね。」
二人は飛竜のほうへ目を向けた。

まだ生きている左目でこちらを睨み、足に生えてる三本の巨大な爪で地面を引っかき、炎魔かアテネ、どちらを先に仕留めるかを見定めている。

「じゃ、鬼崎クンは二分時間稼いでね。その間、私が強力魔術をチャージしているから後はよろしく。」

「えっ?!ちよいまっ・・・」
アテネは勝手にそう言い、炎魔を無視して目を瞑り、チャージし始めた。竜巻が彼女の周りに数々と現れ、体中に電気が走り、まるで暴走した電気柱みたいになっていた。

炎魔は舌打ちすると右手に黒い杖が走り、土方先生の渾身作を破壊した禍々しい黒い大剣を召喚した。

そして、又しても黒い霧のようなオーラに包まれた。

飛竜は目眩から完全回復し、二人組みに向かって怒りに満ちた咆哮を放った。

炎魔はすうつと息を吸い込むと飛竜に向かって走り出し、一気に距離を詰めた。

飛竜は近づいてくる炎魔を標的に決め、その巨大な口を開けながら突進した。

もうほとんど触れ合えるくらいの距離で飛竜は炎魔を食おうと、首を伸ばした。

炎魔は降りくる無数の牙をスライディングでかわし、飛竜の真下に滑り、大検で無防備の飛竜の腹を斬った。

が、飛竜の硬い鱗に白い線の傷が出来ただけで致命傷どころかダメージすら与えられなかった。

そのかわり、それは吹っ飛ばされ、天井に勢い良く張り付いてしまった。飛竜は反射的に翼を広げ、翼膜で飛ばされる勢いを和らげようとしたが切り取られていたため、無駄に終わってしまった。それどころかその切り口が開いてしまい、血がにじみ出て真下にポタポタと落ちた。

数秒後、飛竜も大きな音を立てて落ちてきた。

炎魔は心の中でガツポーズをした。先ほどのやり取りでもう三十秒が経過していた。このまま攻め込めば行ける！

彼は又しても飛竜に向かって走り出した。

そして起き上がろうとしている飛竜に大検で頭に渾身の一撃食らわせた。鱗が硬すぎて斬れないが相当重そうな大検で叩けば飛竜と言えども一瞬怯む。その隙を使い、炎魔は飛竜の脚のかぎ爪と肉を繋ぐ部分を大検で突いた。生物どれも動かす部分は他のところより柔らかいものだ、でなきゃ俊敏な動きは不可能だ。とくに爪と指の間、もしくはそれに似た部分は全員敏感なのだ。爪と指の間に釘を打つという拷問はそれを利用している、っていうかその上に蟻まで垂らすのだから恐ろしい。

鼓膜が破れそうな悲鳴がコロシウムを包み込んだ。シールドのおかげで消音効果があるとは言え、さすがにこの悲鳴は通り、何人かは耳を塞いだ。

苦しそうにもがきながらも、飛竜は立ち上がった。

そして炎魔を完全に敵と認識し、電気柱みたいになってるアテネをもう目に入れていない。

はつきり言えばそれに気を取られていたため、炎魔はその隙を付き続けることが出来た。

だが今はもう彼しか見ていなかった。

憎悪籠もった咆哮がコロシウム戦場を包み込んでいるシールドを振動している。

怒りの矛先を向けられ、羽織が靡いた。それを物ともせず、炎魔は大検を構えた。内心、冷や汗でだらだらだった。

大きく息を吸い込み、飛竜は火の玉を三発連続で炎魔に向けて吐いた。

炎魔は大検を振るい、その三発をさばいた。

火の玉をさばく度に爆炎に襲われたが炎魔は火傷の一つもしなかった。

実は着ている古臭い羽織は見せ付けるためにあるのではない。この羽織は昔の消防員の制服でそれに故、防火効果が付いているのだ。

だから炎魔にはある程度までの炎耐性があり、優をかばった（？）時に火の玉を当てられても少し焦げた程度で済んだのだ。

この決闘で優と戦う時にまたバズーカを使われるのではないのかと思った炎魔だったが、結局違う所で役立ってしまった。

最後の一発をさばいたと思ったら、飛竜は先ほどアテネを攻撃したときのように火の玉を囷に猛然と突進してきた。

が炎魔もそれを予知して体制を低くして飛竜の下を抜け潜り、後ろを取った。と思われた尻尾が白髪少年を襲い、尾の先っぱの横に生えている六本の大きな棘が彼の体に食い込んだ。

尻尾に叩きつけられた勢いで壁に激突し、息が詰まった。

尻餅ついた炎魔だったが、なにもなかったようにすぐに立ち上がり、その場で三メートルぐらいハイジャンプした。

次の瞬間、炎魔がいた場所には飛竜の突進が炸裂し、シールドを振動させた。

そして炎魔は飛竜の突進で広げられた右の翼に向かって壁を蹴り、雄叫びと共に大検を振り上げ、飛竜の翼を切断した！！

又しても飛竜は絶叫した。前とは比べ物にならないほどにうるさく、痛み籠った咆哮だ。しかもそれに加えておびただしい量の血が斬り口から流れ、そして仰け反るたびに飛び散り、地面を赤く染めていった。

観客の方からうおおおおおとおおと感興が上がった。が中には同情の表情を見せるものや顔色を悪くするものもいれば大量の血を見て悶絶するものも多少いた。

飛竜の鱗はたしかに硬いが空を自由に飛ぶために翼を覆う鱗は柔軟であり、唯一斬れる弱点でもある。

炎魔は血の雨を浴びながら大検の炎の形している鞘を肩に置き、ガツポーズをした。あと40秒耐えればこいつを倒せる！！

そして余裕顔で飛竜の方へ向くと大きな影が炎魔の視界を覆った。次の瞬間、重いナニカが炎魔の胸に直撃し、地面に叩き付けた。その際に大検は吹っ飛び、コロシアムの床を虚しく滑り、黒い煙となつて消えた。

飛竜は今度は炎魔の隙を付き、飛びつき、鍵爪で彼を捕らえ、地面に押さえつけた、そして押さえつけている脚に体重を上乗せする。

どんな人間でもこんなことをされてしまえばただではすまない、あばら骨が次々に折られ、そしてそれにやってくる激痛の度に炎魔は悲鳴を上げる。踏み潰されまいと日の下で必死に飛竜の脚を殴るが、ビクともしない。

さらに最後の留めと言わんばかりに飛竜は火の玉を打つべく、開けた口に炎が溜まりはじめた。

やば、もう・・・しぬ。

炎魔は観念して目を瞑り、胸が破れるような恐怖を味わいながら来る死を覚悟した。

爆発音のような派手な音がコロシウムをつつんだ。

静寂が訪れ、炎魔は目を開いた。

目の前には飛竜はまだいた、赤かった鱗が黒く染まり、所々黒い煙が上がっている。

そして炎魔は胸を踏みつけている脚をどかすと飛竜は炭木が折れるような音と共に土ホコリを立てながらドウツと倒れた。

赤かったシールドは、飛竜生命探知不能、通常シールドに変換。

とアナウンスしてもとの薄い水色でシールドに戻り、観客は全員立ち上がり、歓声と拍手がコロシウムに響いた。

その拍手と歓声を受けて雷神アテネは観客に手を振ったり、投げキッスを飛ばした。

それに対して我らが主人公は見てさえもらえないという扱いを受け、こめかみに青筋を立てながら立ち上がろうとした。

が激痛が走り、さらに血をゴフツと吐き、またその場に倒れこんでしまった。

己の無力と飛竜がちょうど炎魔が見えないようにポジションに歯軋りしているところを「ご苦労様、鬼崎くん。」と声が頭上からかかった。

顔を上げるとアテネの逆向きの顔が視界に入った。

「飛竜の相手を一分四十二秒もできるなんて・・・軍隊での対大型飛竜部隊ですら二分が限界なのよ。」

「そいつはどうも。」炎魔は不貞腐れながら言う。「が結局お前が倒したんだから俺は恐らく目向きもされないだろうよ。」

「まあ、そう言いなさんな、実際倒したのはこの私なんだから」

「それもそうだけどなんだかおもしろくねえ。」

「私が見ていたんだからいいでしょう。」

「目え瞑ってたじゃねーか!！」

「そしてあなたはこれで晴れて生徒会の一員よ、これからもよろしく。くひひ」

「嫌な笑いかたすんじゃねー! テンション下がるだろうが!！」

「私が生徒会長である限り、あなたを離さないから覚悟しときなさい」

「クソ、なんだか泣きたくなってきた。」

「ま、でも今日はがんばったことだし、ご・ほ・う・び」

アテネはしゃがみこみ、炎魔の顔を両手で少し持ち上げた。心地よい冷たさが炎魔の頬に染み渡った。

そして彼のおでこにキスをした。

「これからも仲良くしましょ。」アテネは飛びつきりの笑顔でそう告げる。

炎魔はため息をついた。

ま、いつか。

炎魔は心の中でそう呟き、意識が飛んだ。

決闘の末に…

龍牙魔術学園は魔術師の少年少女が学び、鍛錬し、魔術を極める場所である。

それに故、事故や怪我は普通の学校の医務室では手に負えないため、龍牙魔術学園は医務室というよりも小さな病院みたいな施設がある。その設備は万端で必要とあらば手術も可能である。

「何で龍女（龍牙魔術学園の女子寮の略）の林さんがここで俺の治療してんですか？」と炎魔は躊躇いも無く不満をたれる。

あの決闘の後、やっと警察が来て、墨の塊と化した飛竜を収集し、搜索を始めていた。そして唯一、大怪我を負った炎魔は学園の病院施設に運ばれ、超強力 of 癒しジェルを塗られた。

奇跡的に内臓は無事だったから手術する必要も無く、担当の保健の先生とやらに手当てされることになった。

そこで現れたのが寮母の林さんだった。

「私も元々、この担当だったんですけど、前任の寮母が引退したんです。それで学園長がクジを引いて、この私に白羽の槍が刺さったんです。」と林さんがブルーなノリで炎魔の不満をそり流す。

「大丈夫ですよ、腕は保障しますし、変なこともしませんよ。」

「肋骨が折れてるつてのに俺を強制する一歩手前だったじゃねーか！ 何が『腕は保障します』だ、それに変なことしないって、もう動けない俺の腹に猫の絵描いてんじゃねーか、飲み会じゃねえんだよ！…！」

「あら、でも素敵ですよ。」

「嘘つくんじゃないやねえ！！ おまけにヘタクソすぎだろ、コレ！！ ！どこの世界に翼生えてる猫なんだよ！！」

「一々文句多いですねー。そんなんじゃない女の子に嫌われますよ？」

「こんな事する女の子いねえよ!!」

「取り込み中、失礼する。」

二人の不毛なやり取りに終止符を打ったのは松平学園長だ、炎魔のベッドを囲んでいるカーテンを空け入ってきた。

「大丈夫か、鬼崎君？」と松平は尋ねてくる。

「はい、まあ、なんとかありますよ。それより学園長こそ大丈夫ですか、なんか左頬が赤いんですけど…」

「いや、これは気にするでない」学園長は慌てて答えた。「要するに君が無事だつて事じゃ。では驚は失礼する！」

いきなり入ってきたように去る松平学園長。何しにきた？

「はい、とりあえず治療はこれでおしまいです。完全回復には最低でも四日かかります…がくそむ…糞虫の場合は明日には治つてるでしょう。」

手当てを終えた林さんは近くの洗面器で手を洗い、炎魔にそう告げる。

「言い直した割には糞虫のままかよ、おい。」

炎魔は静かなる怒りを燃やしながらつつこむ。

「ではまた明日。」

林さんは炎魔の怒りを物ともせず白衣を椅子にかけ、病棟を去った。

一瞬呼び止めようと思った炎魔だが意味がないことを悟り、やめた。

夕日で赤く染まる病棟に炎魔はため息をついた。

変な決闘に巻き込まれ、飛竜が現れ、そしてあまつさえ肋骨を十本も折るといふ大怪我を負ってしまった。

ここまで理不尽に事が進むと炎魔が不機嫌になるのは無理もないことだ。

それにこの怪我で遠足には行けないことは明白だ。

炎魔も一応、一年全員とまではいかないが他のクラスの人と触れ合う機会を楽しみにしていた。

山で修行中には同年代の子とは殆どつるんだことが無い、だからこそ遠足とは言えどもわくわくしていた。

炎魔が赤い夕日に浸っている病棟で暇を持て余して向かい側の戸棚に入っている容器を数えていると「失礼します。」と言うと共に雪白鈴奈が入ってきた。

「お、雪白か。元気だったか？」

「鬼崎君の方は大丈夫なの？飛竜に踏み潰されてすごい悲鳴上げてたけど…」と雪白は心配そうに訊ねてくる。

「ああ、なんとかな」炎魔は余裕そうに答える。「肋骨十本もやられたけど、明日の夕方には治る。内臓に怪我無くて助かった。」

「ええ？十本も?!」と雪白は驚く。

「ああ、綺麗に両側五本ずつ。まあ、飛竜相手に踏み潰されそうになってこの程度で済んだんだから奇跡的に運が良いな、俺。」

「そうなんだ。でもそれじゃあ明日の遠足は無理だね。」と雪白は言う。

「そういうことになるな…」「お見舞いに来たよー!!」

病棟の引き戸が勢い良く開き、元気ででかい声が響き渡った。

そして足を踏み入れたのは生徒会の決闘を実況をしていた紅いセミロングの鳳凰光に生徒会メンバー全員、つまり雷神アテネ、土方優にテュラエル・エンジェルダストだ。

「ビビッたー、ノックしてから入れ!!」

突如の乱入に心臓が止まるほどビツクリした炎魔は怒鳴る。

そして嫌な予感が炎魔の脳内を横切った。

炎魔も一応、生徒会の一員なのだが生徒会に関わる度に悪いことばかり起こっている。

それにアテネがお見舞いなんて可愛いことをするような女ではない、

と炎魔は確信している。無理も無いことだけだ。
さらに男嫌いの土方優が加わると不気味さを増し、炎魔の不安を駆り立てる。

「聞いたわよ、肋骨十本しか折れてないんですって？」挨拶もせず
にアテネは隣の患者ベッドに座り、不満そうに言う。

「十本もだ！言っとくけど、超いてえんだぞ！！」炎魔は早速つつこむ。

「では、僕が君の足にローションを塗ってあげましょう！」テュラ
エルの手にローションチューブ（1450円）が現れた。

「俺の足にローション塗って、なにが解決するんだ？！つーかマジ
でやめろ！ てめえの鼻に突っ込むぞ！！！」

「お願いします！！ ローションを鼻に突っ込むと知能が上昇する
効果があります！！」

テュラエルは興奮した顔つきで炎魔にローションチューブを手渡す。
「ローションにそんな効果があつてたまるか！！ お前は知能以前
に常識を学べ！！」と炎魔は怒鳴り、手渡されたものをテュラエル
という変態に投げつけようとしたが外れて向かい側に立っていた骸
骨の目の穴にはまった。

「そういえば鬼崎くん」テュラエルが飛んでいったチューブを骸骨
から取り出している間にアテネが思い出した風に言う。「責任、取
つてもらわよ。」

「は？なんの？」

「あなたのせいで私の『優ちゃんブラブラ計画』が台無しになつち
やつたのよ！ あともう少しで成功しそうだったのに！！」アテネ
はよほど悔しいのか、歯軋りする。

「知るかそんな計画！！ ってか何で俺のせいで台無しなんだ？！」

「せっかく堅物を絵に描いたような優ちゃんが、サラシ派からブラ
ジャー派に切り替えたのにあんたが優ちゃんの胸を揉みまくったか

ら、また戻っちゃったじゃない!!」

「そんな… 鬼崎君がそんなことを…」 雪白がショックを隠せずに言う。

「ほんと、最低だよな。」 鳳凰光は呆れながら肩をすくめる。

「いや、ちよつと待てえ!!」 炎魔は首筋に血管を浮かべて叫ぶ。「確かに土方の胸を触っちまったかもしれないけど、それは不可抗力だ!! おまけにそれも一回だけだ!! 土方、頼むから何か言ってくれ!!」

炎魔は優に話を振ったが、優はただ虚ろに炎魔も見ているだけだった。

今更気付くが彼女は先ほどから一言も喋らず、虚ろな目でそこに突っ立っているだけだった。まるで生きる希望を失ってしまったかのように…

そしてどうでもいいことだが彼女の包容力の塊である胸が小さくなっていた。

「一回だけって何よ! 私はまだ一回も触ってないのよ!! 何時もはサラシが邪魔だったし。」とアテネはブーイングを飛ばしてくる。「お前はとりあえず同性愛から卒業しろ!!」

「僕だつてまだ触らしていただいてませんよ?」今度はテュラエルまで参加する。

「当たり前だろ! お前が触ったら変態として警察に連行されるからだろうが!」

「アタシだつて優の友人を長年やらせてもらってるけど今の優の胸揉んだことないんだよ!」

「おい、お前らしい加減にしろ! 同性愛が今流行りなのか?! つーか俺の見舞で何で土方の胸の話に火がついてんだ?」

「むむつ、鬼崎クンの隣に良い素材の青髪の子、誰?」とアテネはいきなり話の流れを無視し、雪白をロツクオンした。

雪白は身に危険を感じたのか体を強張らせる。

「雪白鈴奈だろーが、お前のクラスメートでもあんだから覚えておいてやれよ。」炎魔はため息交じりに告げる。

「ほほーう、」アテネはニヤニヤし始めた。「プロデューズしがいがあるわね。」

「あのお…私、もう帰るね。じゃあね鬼崎くん。」

雪白は急いで椅子から立ち上がり、病棟から出ようとする。

が引き戸の所でアテネに肩を？まれる。

「逃・が・さ・な・い・わ・よハート。必殺、女神誘拐、！」と言いながらアテネは雪白を小脇に抱える。

そして雪白の悲鳴が遠のいた。何故かテュラエルと鳳凰も『プロデューズ開始』なんて言いながらアテネの後を追った。

病棟には炎魔と未だに虚ろな目をしている優は肩を落としたまま突っ立っていた。

「どうした、そんなしけたツラしやがって。決闘の時の潔さは何処に行っちゃまったんだ？」

「貴様にはどうでもいいことだろう。」とつれない答えが返ってくる。

どうやら優は精神的にノイローゼ状態のようだ。ネガティブ思考が口から吹き出てもおかしくなくらいに暗い。

炎魔に対しては何時も敵対的な態度でつかかってくるのが彼女の性。まあ、初めての出会いがあまりにも過剰だったから当たり前といえば当たり前だ。

全裸を不覚に見られて良く思う女の子はそんなにいるまい。そして鼻血をたらしながら「ナイスバディー」と賞されたらなおさらだ。

炎魔は優とはそこまで話をしていないが、こんなブルーなノリは彼は大嫌いなのだ。まあ、炎魔も愚痴を滝のように零している時点で人の事は全く言えないが…

「おい、ちょっとそこに座れ。」炎魔は何か思いついたのか、命令口調でベッドの隣にある椅子に指差した。先ほどまで雪白が座っていたが今は退場中。

優は黙って従い、その椅子に腰掛けた。

ベッドの隣には椅子だけではなく、患者の小さな物が置けるようにちよつとした机がある。炎魔はそれを自分と優の間に来るように引っ張った。

「よし、腕相撲やろうぜ！」

炎魔は腕をめくり、肘を乗せる。

「は？」

いきなり腕相撲を挑まれて、優は困惑した顔で返す。

「何を言っているのだ、貴様は？ 病人相手に腕相撲など出来るわけないだろう。」

「ほ〜う、負けるのが怖いのか？」

口元をゆがませ、挑発的にニヤニヤする炎魔。

「そういう意味ではなくでだな、貴様は安静してなきゃいけないだろ…。」

「そうだよな〜、」炎魔は優をさえぎる。「病人相手に負けたら本当にはじだもんな〜。」

言い方。声のトーン。そして哀れなものを見ている表情。すべてが優の神経を逆撫でする。

「貴様には肋骨が折れただけは足りないようだな、」拳をポキポキ鳴らしながら紅いセーラー服の袖をめくり上げ、炎魔同様に肘をその小さなテーブルに乗せる。「その腕の骨を粉末にしてやろう。」

「こえーよ！ 腕相撲でどんだけやるつもりだよ？」炎魔は鼻白む。

二人は互いの手をつかむ。

優は怒っているせいか、炎魔の手を握りつぶそうとしているのかのよう握力だ。

だが以外にもやわらかく、そして優しい感触が炎魔に伝わり、不覚にもドキドキしてしまった。

そして「レディ、ファイ！」と炎魔は号令をかけた。

数分後

つかみ合っている手はまだどちらにも倒れかけてはいなかったが震えており、場を緊張感で満たした。

が、いきなりプツンと紐が切れたように炎魔の腕が倒れ、大きな音と共にテーブルの上に叩きつけられてしまった。

元々炎魔には勝ち目は無かった、優の言うとおり怪我人だからだ。

肋骨を折られて全力を出せる人間はいない、さらに炎魔は骨折を治すために強力な癒しジェルを使われている。

前に使ったのと同様、縫って広がったジェルは筋肉をゆるませ、拘束する。

そんなわけで寝た姿勢で、しかも腹筋を使えず殆ど腕だけで挑んだのである。勝てるわけがない。

「どうした？その程度でおしまいか？」

今度は優が炎魔を挑発す始める。どうやら先ほどまで憂鬱は吹き飛んでしまったらしい。

「うるせい、」炎魔は返す。「こっちは怪我人なんだ、少しは自重しろ。」

「勝負を挑んできたのは貴様の方だろうが。」

「まあ、それもそうだけど…まあいいや、これでおあいこにしようや。」

「なんの話だ？」優は首を傾げる。「言っておくが私は負けていないぞ、今日の決闘も、そしてこの腕相撲も。」

「いや、それじゃねえ。」炎魔は首を振る。「俺が闇の力を使っちゃって、お前をあんな風にしたことだよ。」

「貴様！私に何かしたのか！？」声を荒げ、優は椅子から立ち上が

った。

「いや、何もしてねえよ。闇の力を使うと必ず副作用が出ちゃうんだよ。」

「やっぱりしているではないか！！今日は見逃してやろうと思ったが、やはり貴様には今日、引導を渡してやろう！」

そんなことを言いながら彼女の右手にチェーンソーが現れた。

「ちよつと待てえ！！それやられたら流石に俺も死ぬ！！とりあえず落ちていて俺の言い分を聞いてくれ！！」

炎魔は涙目で必死になる。動けない状態でチェーンソーはもはや死亡フラグの粹を超えている。というか普通に死にます、皆さん真似しないように。

「ふんっ、いいだろう。貴様の言い分を聞いてやろう。もし私が納得したら見逃してやろう、だがそうでなければ……」

今度は優の左手にブンゼン・バーナーが現れる。

「俺の闇の力は暗いところで姿を消す、夜になると身体能力が上がる、と暗いところで闇を実体化させることが出来る、この能力が基本だ。そして今日のお前との勝負で俺は闇の力を応用して、お前の影の中に潜ませてもらった。だが闇の力には副作用がある、それは近くににいる人間のネガティブ心情、まあ強いて言えば心の闇かな、を増幅させることだ。お前は恐らく、いきなり俺が消えたことに少し不安になっちまったんだろうよ、そしてその不安が増幅して恐怖に進化しちまった。」

炎魔の説明を優は無言で聞いていた、そして彼が終えるとしばらくその沈黙を続けた。

「つまり……二つの武器が優の手から消えた。「私はお前に負けたのではなく、自分自身に負けてしまったということだな。」

「まあ、そういう見方も出来るがあまり自分を責めるなよ？大抵の人はあんな恐怖を耐えられずに精神崩壊の寸前の状態に陥る。恐怖のあまりにその場を掻け走って泡を吹かなかつたのはお前が初めてだ。」

優はため息をつき、まだ黙り込んでしまった。

「そついえば今日、貴様は負けた。」

優が藪から棒のように切り出してきた言葉に炎魔は「は？」と首を傾げるしかなかった。

「皿が割れたから貴様の負けだろう？」

思い出してみればあの飛竜が墨の塊と化したあと、炎魔の皿は割れていた。

「まあ、確かにあの決闘のルール上では俺の負けだが…それがどうした？」

この会話が一体何処へ繋がるのか炎魔にはわからなかった。

というより今更それが何の意味をもたらすのか？

「敗者は勝者に従う義務がある。」と優は勝手に続ける。

「えつ、」炎魔は絶句する。「マジでトイレ掃除やれと？」

そついえば決闘が始まる前にそんなことを話していたな。

「違う、そんな事は貴様にはやらせん。よくよく考えてみれば盗撮

カメラを搭載するかもしれないから却下だ。」

「でも俺エンジニアじゃねえからシャワーも直せないんだが…」

「そして私の部屋に入るなど言語道断！私の部屋に男など絶対に入れん！！」

「じゃあ、何をしろと？」

「そつだな、とりあえず貴様のこと、全部洗いざらい吐いてもらおうか。一体何故こんな時に転校して来た？今は五月末だから新学期が始まって殆どたったの二ヶ月だ。新学期にちゃんと入学出来なかった理由はなんだ？そして貴様そのものは何だ？未知の力を駆使し、白髪に紅眼という漫画でしか存在しないふざけた設定の上に飛竜相手に引けを取らないその戦闘能力。そんな怪しい輩をこの風紀委員長、土方優がすこすこと見逃すとも思ったか？！」

「出来れば恥ずかしくもじもじしながら『君の事、もつと教えて。』というような感じを期待していたんだが、流石にこれは傷つく…」

「何か言ったか？」優は炎魔にアイアンクローを食らわせた。

「え、実は俺、北の天狗山という昔、天狗が祭られていた地域から来た。」炎魔は鼻血を垂らしながら説明し始める。「今は天狗を敬う人がいないからその神社は空っぽで誰も来ないから俺と師匠が勝手ながら住まいにしている。そこで鳥やキノコを集めて自給自足をしながら残酷な修業をして、山をおりてちよつとした町でバイトをしながら図書館で強制的勉強を強いられてた。そして今年、師匠が俺を学校へ送ろうと決心した、なぜかはしらんが。でも残念ながら魔術師学校は全部高いからバイトやつても賄えないなんてレベルじゃなかった。そこで年に一度行われる、全国才児コンテストが偶然、天狗山のふもとにある町で行われることを耳に挟んだ。参加には制限がない上に上位の五人が国によって学費が援助される。俺はこの地獄から這いずるチャンスだと思つて図書館で猛勉強して挑んだら七位にまえなれたけど上位五人には当初入れなかった。が、採点のミスと上位の一人がカンペ使つてたのがばれて俺が上位五人に仲間入りした。」

「ずいぶん殺伐とした過去だな。」優はつつこむ。「だがそのコンテストは二月に行われた、そして採点結果が出るのは三月だ。ちゃんと入学に間に合うはずだ。」

「問題は俺、戸籍が無かつたんすよ。まさか今時戸籍がない人がコンテストで出場するどころか上位五人の一人になるとは思わなかつたらしい。だからその手続きが思った以上に時間がかかつて俺は転入という形でこの学園に入ることになった。これでいいか？」

「まだ貴様自身のことあまりわからなかつたが、怪我人だから今日はこのくらいで勘弁してやろう。」

優は立ち上った。

「そういえば雪白があのお姫様にさらわれちまつたけど、風紀委員としてほつといていいのか？」炎魔は尋ねる。

「校則に同姓の誘拐は禁じられていない、それに悪魔への生贄にで

もされるわけではない。」

「でもなんか変な風にプロデューズされてたらどうすんだ？」

「安心しろ、姫は可愛い女の子が大好きだ、絶対に悪いようにはしない。それにプロデューズはあれが初めてではない。プロデューズされた女子は全員、姫に感謝しているくらいだ。唯一、プロデューズ最中に姫のセクハラが過剰らしい、まあそれくらいは我慢してもらうしかないがな。」

「まあ、害がないならいいか。」炎魔は安心した。一応、友達っぽい関係なのでとんでもないことになったら後味が悪くなる。

「後一つ、貴様に聞きたいことがある。」

「何だ？」

「飛竜が動けない私に火玉を放ったときに何故私を助けようとした？お前の古い消防隊の制服の羽織が無ければお前は焼け死んだかもしれないのだぞ？」

「はあ、」大きな溜め息が炎魔の口から開放した。「姫もお前も、どうしてそんなことを聞くのがわからんな。」

「いいから答えろ。」

「お前がやられりゃ、大勢の人が悲しむ。だからお前を死なせたくなかった。ただ、それだけだ。」

「そうか。」優はそう短く返し、引き戸へ向かった。

「ではまた明日、お見舞いに来てやるとしよう。」

「出来ればメイド服でおねがいする。」と炎魔はリクエストする。

「そんな服は持っていない！」そう怒鳴ると引き戸をピシッと閉めた。

日がとつぷり暮れたところに土方優は龍女の最上階の十階に着いた。そして自分の部屋である112番のドアの前に着くと不意に113番の「鬼崎炎魔」と書かれたプレートが見えた。

「鬼崎炎魔…悩ましいな」そう呟きながらカードキーで部屋のロッ
クを外し、入った。
入る際、顔が嬉しそうに微笑んでいた。

男の子みたいな女の子って現実にいるの？

第二十一章

「若手芸人の浮気率は95パーセント。政府は浮気を罰即にするか検討」だって？そんな下らねえこと検討してる暇あんなら仕事しろってんだよ。もしくは高層ビルの階段をうさぎ跳びで上ってるってんだ。」

鬼崎炎魔は新聞を読みながらあさっぱから政府に文句をブツブツ言う。

彼は龍牙魔術学園病院施設を担当している林さんが持ってきた朝ごはんを食べ終え、その人が読み終えて置いていった新聞を読んでいた。

他にも大國メリケンが不況に陥った話や新しい義手の誕生、病院に怪しい黒い影の出現、墓があらされた、とある会社の牛のひき肉は実はワニのひき肉だった等々、どうでもいいことが書いてあった。

しばらく経った後、「失礼します」という声と共に引き戸が開かれた。

「お、雪白おはよ…う？」声の主が雪白だと思っていた炎魔の挨拶は途中で疑問系に変わってしまった。

三つ編みオサゲで眼鏡の地味な姿がトレードマークだった雪白。今はその姿は見間違えるように変わり果てていた。

髪は肩の上ぐらいまでに短くカットされ、頭の両サイドに髪の毛の一部が束ねられていた。

そして眼鏡はもうかけておらず、こちらのほうをうつむいていた。スッピンだった顔に薄く化粧を施しており、素の良さを有り得ないくらいに引き出していた。

髪と眼鏡と少しの化粧を施した結果、雪白は地味子から美少女に進化した。

「グツジョツブだ、ヒメツチ!!!」炎魔のテンションは高ぶった。

「鬼崎君までそんなこと言わないでよ、も〜。」

どうやら炎魔みたいなリアクションにはもう遭遇済みらしい。

足をモジモジして真っ赤になって照れている。

その可愛い仕草はレーザー光線の如く、炎魔の胸を貫いた!

「いや、だつてお前、変わりすぎだろ! 学級委員長タイプ购地味な子が、あ、地味つて言っちゃったよ、まあいいか、地味な子が学園のマドンナ候補に入ってもおかしくないくらいに変わっちゃまったんだぞ! 男として高ぶらなかつたらおしまいだろうが!」と炎魔は暑く語る。

「うう〜、でもお。」雪白は涙目になる。「そのかわり生徒会長さんにセクハラされるし、鳳凰さんにも写真を撮られて、生徒会新聞でグラビアページを追加するぜ、なんて言い出すし…」

「何?! よし、ちょっと買いに行ってくる!!!」転入以来、最高の高ぶりを見せる炎魔だった。

「そういうと思つて持つてきたぜ!」と待つていましたと言わんばかりに引き戸が開き、満面の笑顔で鳳凰光が入ってきた。

「生徒会長と優等生の熱くてイ・ケ・ナ・イ・恋!?! 今日を持つて発売だぜ!」

「でかした!!!」炎魔は興奮して赤毛の少女が差し出してくる生徒会新聞を掴もうとする。

「ダメエエエエエ〜!!!」雪白は顔を真赤に絶叫を上げ、炎魔がつかめる前にそれを奪い去った。

そして掌からバスケットボールぐらいの大きさの水球が現れた。どうやら彼女は水系のエレメント魔術を扱うらしい。

生徒会新聞はその水球に放り込まれた。その中で回され、潰され、

そして最終的に破れた。

「もう、鬼崎君のバカ！」捨て台詞と共に新聞の残骸を丁寧にゴミ箱に捨て、病棟から走り去っていく。

「ちょっとイタズラが過ぎちゃったね。」鳳凰光はそう言いながらもクヒヒと笑っているとところを見ると反省はしていないようだ。

「本当はグラビアページなんて無かったんだらう？」

「鋭いね、君。ちょっとハレンチ過ぎて学園長からダメだしされちゃったぜ、鼻血出しながら。でもレイレイの写真が載っていることは本当だぜ。」

「レイレイ？」炎魔は首を傾げる。

「雪白さんのこと。生徒会に入る皆、ニックネームを付けられるんだぜ。」

「へー…っていうか雪白は生徒会役員だったのか？」

「うん、つい昨日から生徒会書記、元書記のエルを会計に回してね。」

「ふーん、ところでお前も生徒会役員なのか？」

まだ紹介されていないが昨日からアテネ達と一緒にいる。

「そ、生徒会新聞記者、鳳凰光とはこのアタシだぜ。」
自慢げに胸を張る。

しゃべり方のおりにかんぱつそうな女の子だ。土方優のスラツとした体付きとは反対に少ししっかりとした肉つきだがフェロモンの分泌量が多いのか、女性らしくしなやかな感じのスタイルだ。外で行動していることが多いためか少し肌が日焼けている。

だが何よりも目立つのは子供のような純粹な、そして周りを照らすような笑顔に水色のカチューシャをつけた肩まで伸びている燃え上がるような赤い髪。アテネや優を「綺麗」の分類に入れるとすればこちらは雪白と同じ「可愛い」に入る。

「一ヶ月に一度発行される新聞で学園での出来事とか新事項に生徒が書くエッセイとか載せるモンだ。一部五十円だからいっぱいじゃ

ないけど結構売れてるんだぜ。」

「へー、そして今月にはあの決闘の事と飛竜のネタがあるから売れ行きが良いと予測出来るか？」

「絶好調になるは間違いないぜ！」鳳凰は親指をグツと立てる。

「そしてさり気なくに今の生徒会のアピールして支持率を高めるといふ魂胆か。」

「ギクツ」鳳凰に視線は泳ぎ始めた。

「生徒選挙で決まった生徒会じゃないから大方、支持率はそこまで無かったんだろう？というか前生徒会長の計画がバレて生徒会そのものの信頼が落ちちまったからそれを盛り返すためにこういうイベントを定期的にあつて、現生徒会の實力を見せ付ければ支持率を地味にアップするってところか？」

実は炎魔は何時も薄い布団や野宿だったのでベッドは今回で初体験なのだ。

それに何故か緊張してしまい、昨晚眠れなくなってしまったのだ。眠る時に寝ようとすればするほど目が覚めていくという現象に炎魔は陥ってしまい、色んなことを考えていたら決闘の矛盾さに気付き、推理と仮説を立て、その結論にたどり着いたわけである。

生徒会役員として暴力を振るって問題になるのは当たり前だ。

だから罰せられる覚悟をしていたが、それが決闘になるのはあまりにも変というかバカらしい。

それだから炎魔も最初指定された場所には行かなかったのである、

そしていくつもありも無かった。

しかし電話（生徒手帳）で土方先生を使って脅されてしまったては行かねばならなかった。

炎魔は前に土方先生に生徒指導室へ連れて行かれたときがあつたが何をされたかは覚えていない。

思い出そうとすれば体が震え始め、冷や汗が体全体から滝のように流れ始め、屋上に行き、鳥になろうと思ってしまう。

何かとんでもないことをされたのは明らかでそれで脅されて結局行ってしまった。

そして決闘では炎魔は一勝さえすれば彼の勝利、どう考えても生徒会にとって不利なルール。

そこで転入早々、悪名が響き渡っている炎魔に全勝すれば支持率はアップに繋がる。

「バレちゃあ、しょうがないね。」鳳凰はぺろつと舌を出す。

「いやあ、君の言うとおりこの生徒会ってまだ結成されてから日が浅いんだよ。今は六月の真ん中だから出来てから一ヶ月がたったころかな？」

「おいおい、お前からこの学園に来て二ヶ月で前生徒会を粉碎して、新しく一年で構成されている生徒会を作ったのか？ある意味スゲーナ、おい。」炎魔は呆れながらも感心する。

「まあ、はつきり言えばあの姫が全部一人でやってのけたんだ。入学する前から色々調べてたらしいぜ。それで持ち前の美貌で前生徒会長がスケベ心をくすぐってそいつの生徒会に入って蹴落としたんだってさ。アタシや優とかは後からスカウトされて入ったってわけ。どうだ、すごいだろ！」

「何故そこで鳳凰さんが自慢げなんだ？」炎魔は冷ややかに突っ込む。

「ところでこの週末、一年は遠足じゃなかったのか？」

「ああ、それ、昨日の騒ぎでキャンセルになったぜ。ま、アタシ達、生徒会は元々行けなかったからどうでもいいんだけどな。」

「は？何で？」

「二週間後に体育祭があるからに決まってるからだぜ。」ここで鳳凰の口調に熱がこもる。

「体育祭、別名『龍牙体育武道祭』はこの学園の三大伝統イベントの一つだぜ！そこでは普通の学校ではやらない競技や魔術対決、そしてなんて言ったらラストを飾るルール無しのカチンコ対決！！

ああ、話してるだけで燃えてきたぜ!!」

鳳凰は目を輝かせながら熱く語る。

「もちろん、炎魔も出るよな?!あの決闘で見たぜ、三年生さえ余裕に撃退できる優と互角に渡り合えるなんて姫以外初めて見たぜ!お前なら優勝も夢じゃないぜ!!」

「鳳凰さん、とりあえず、少し落ち着け。」炎魔は彼女を宥める。

「ベッドカバーが焦げ始めてるから落ち着け。」

彼女は熱く語る内に炎魔のベッドに近寄っていた。

それだけなら問題ないが何故か彼女の周りから塵気楼が見え始めた。それに布と触れている部分が少し茶色になっていき、煙が出始めている。

「あ、わりい。」彼女はそう詫びると纏っていた熱気と塵気楼が消えた。

「アタシって興奮すると周りを燃やしちゃうんだよな。アタシの一族、鳳凰家って昔からの家柄で別名、燃える家系って呼ばれてて一代目頭首は文字通り、鳳凰の化身、だったんだ。だからいまのように無意識に炎の魔術を使っちゃってる時もあるから、普段リミッターをつけてんだけど、役にたたねえなこれ。」

そう説明するとカチューシャを外し、不満そうに見る。

「それも結構だが病棟は燃やすな。何が引火するかわかんねーだろうが。」

炎魔は頭を掻きながら言う。

「気にするな、その時はアタシが守ってあげるぜ。アタシの一族は全員、炎の加護があるから火じゃあアタシ達を傷一つも付けられないぜ!」えっへんと鳳凰は威張る。

「さてと、アタシはそろそろ帰るぜ。ちなみに、エンエン」と、エンみゃん、どっちがいい?」

「は?」炎魔は豆鉄砲を食らった顔になる。

「いや、君のニックネームを何にするか今、生徒会で大議論中なんだ。アタシは、エンエン、がいいと思うんだが姫は、下僕、優

は「ウジムシ」、エル（ちなみにテュラエルのことね）は「ローシヨンの素晴らしさがわからない神に呪われるべし忌むべき存在」が
いいと言ってるんだけど君はどうなんだ？」

「わあ、素敵なニツクネーム候補だね、どれにするか迷っちゃう、
なんて言うかああ！」と炎魔は突っ込む。

「どう考えてもただの嫌がらせじゃあねえかあ！最後の野郎はも
はやニツクネームですらねーし！」

「まあまあ気にすんな。」鳳凰は今度はニシシと笑う。「お互い、
生徒会役員としてがんばろうじゃねーか。あ、後アタシのことは、
ヒカリ、って呼んでいいぜ！、それじゃあな！」そっぴい残して鳳
凰光はスタスタと病棟を去った。

「ふん、太陽の如く輝いてやがるぜ」そう言っつて炎魔は昨晚取れな
かった睡眠を取るべく眠りに陥った。

自己紹介で人の事ってわかるの？（前書き）

ずいぶんと長い間お休みしてしまいました。

これからはちゃんと投稿する予定なので、暖かい眼で見守ってくださいー！

自己紹介で人の事ってわかるの？

「やっとわが部屋についた」

炎魔は女子寮の十階までの階段を上り（エレベーターなんぞない！）、やっとの思いで自分の部屋にたどり着いた。

回復力が尋常ではないとは言え、肋骨を大量に折って平気な人間などいない。

おまけに病棟を出た途端に警察に出くわし、飛竜の件について軽く職務質問をされた。

どうやら手がかりが全く無くて、困り果てている。

飛竜は殆ど炭の塊で役に立たなく、入っていたコンテナの残骸からは何も見つからなかったらしい。

唯一、雷神アテナが自分の力を示したくてやったとのささやかな疑惑があるが証拠が無い以上、どうすることも出来ない。

炎魔は青いキーカードを取り出し、ドアを開けようとしたら横に設置されている部屋番号の下にあるネームプレートが何時もと違うことに気付いた。

普段は「鬼崎炎魔」としか書いてないのに今は炎魔の下に「天草空」と付け加えられていた。

そしてもう一つ気付いた事は、もう部屋に誰かがいる、ということだ。

しかも複数に。

炎魔は誰がいるのかをすでに予想し、ため息をつきながらドアを開けた。

「せっかく新アイドルミミちゃんがいいお尻をしてるって聞いて行って見たのにぜんぜんだめだったわ。でかいけど、揉み心地が腐っ

たメロンみたいだったわ。」アテネがぶーぶーと文句を言う。

「それはあまり鍛えられていない証拠だ。我が命桜撃流に通えばちゃんと引き締まる。」優はお茶をすすりながら冷たく言い放つ。

「だよな。アイドルっていつても大体は外で遊んでないし、座っただけだからお尻が硬くなっちまうんだよ。」光は優に同意する。「でもアイドルですからお尻にはそこまでこだわっていないじゃないでしょうか？」と鈴奈は正当な意見を述べる。

「そうですね。でもこの『モチモチローション』を買えばそんな悩みもすぐ解決します。これを塗ればその塗った部分が柔らかくなる優れものです。今ならもれなくこの『ローションマンフィギュア』も付きます。」

炎魔の部屋に生徒会の皆がいた。

部屋の真ん中に置いてあるテーブルを囲い、今何処そのアイドルの話で盛り上がっている最中である。

すでに長時間ここにいたらしく、空のチップス袋やジュースなどが散らばっていた。

それに加え、部屋が少し模様替えされていた。

この一週間、炎魔のベッド代わりに勤めていたハンモックは無くなり、その場所には白黒のシマシマ模様のソファが置いてある。

そしてその部屋の反対側（入って左側）にはベッドがあり、何処にでもありそうな感じだがハンモック睡眠だった炎魔にとっては高級ベッドに等しい代物に見えた。

「あ、やっと来たわね、鬼崎くん。そんな所で突っ立ってないで早く来なさい。」

アテネがドアに立っている炎魔に気付き、チヨイチヨイと手招きしてくる。

「いや、これ突っ込み所がありすぎて困るんだけどとりあえずやってみるか。お前等何人の部屋で当たり前のようにいるんだ？って言

うかどうやって入った？しかも何か勝手に模様替えされてるし、せめて一声掛けてくれりゃいいのに。それにヒメツチ、お前わざわざアイドルのお尻を触りに行ったのか？ファンに殺されるぞ？それに土方、引き締まったら余計固くなんじゃね？それにアイドルつっても座つてばかりじゃないと思うぞ。そしてエル、それどう見てもペ シマンじゃねえーか、何パクツてんだ！？」

炎魔は息継ぎもせず丁寧に突っ込んだ。

「姫と呼びなさいって言ってるでしょー、この低脳。」とアテネは冷たく言い返す。

「引き締めれば弾力も上がる、そんなことも知らないのか、このウジムシが。これだから男は・・・」と優。

「アイドルは外に行くとか記者とかカメラに追われてるから外では遊べないんだ。常識無いな、君は。」と光。

「ペ シマンではありません、ほらロゴが違うでしょうに、この変態。」とテュラエル。

「お前に言われたくねえよ！！」

「大体、模様替えしたのは私たちじゃないわ。」

アテネは告げる。

「じゃあ、誰が？」

と炎魔が質問した直後、「・・・私。」と後ろから呟きが聞こえた。振り向くとそこには女の子が、龍牙魔術学園の制服を腕に抱えて立っていた。

今は夏の始まりでもう周りが熱くなり、そろそろ衣替えの時期。

それとは反対に女の子は黒いマントを羽織っていた。

それには見たことが無い古代文字らしきものがビッシリ塗ってあった。

だが炎魔はその不思議なマントよりもその女の子の顔に驚愕していた。

別にその娘はとつもないブスだったと言う訳ではない。

顔が・・・信じられないほど炎魔とそっくりなのだ。

後ろで束ねられた白くて長いシルクのような髪、異様なその赤い眼、細い顔立ち。

唯一、違ふことと言えば性別と可愛いという事実である。

二人は無言のまま、お互いを見つめた。

「・・・誰？」

少女は首を傾げ、猛獣でさえ大人しくなりそうな優しい声で沈黙を破った。

「鬼崎炎魔。そういうお前は誰だ？ってというか熱くねーのか、その格好？」

「・・・大丈夫。」

そう言うとクスッと笑った。

炎魔にこの微笑がストライクゾーンに命中したのは言うまでも無い。

「・・・君、おもしろいね。」

「何で？」

炎魔は少し困惑した。

「一体何を見て、そう思ったのかを、是非知りたい所だ。」

「・・・私を真直ぐに見てくれる。・・・名前も聞いてくれた。」

「いや、それ当たり前じゃね？ それに、そんなことなら俺の後ろにいる阿呆の連中だっしてしてくれる。」

そう言つて、後ろの方に親指を向ける。

「ってというか鬼崎くんが邪魔で見えないんだけど、退いてくれないかしら？ 客人が来たならちゃんともてなしてやらんか、このウジムシが。お嬢さん、ローションプロレスに興味はありますか？」

「ところで、この部屋に何の用だ？」

後ろで騒いでいる生徒会を無視し、要件を尋ねる。

「・・・私、今日からここに住むことになった。よろしくね。」

「・・・」

「どうやら部屋のプレートに、知らない名前があると思ったらそういうことだったらしい。」

まあ、そこまで難しいことではない。

というより、この娘が入ってきたときから薄々感づいていたが、まさかなと思うのが自然。

本来なら説明が欲しい所だが、この一週間で色々な事が続いたため、炎魔は驚くことをやめてしまった。

おまけによくよく考えてみれば女子寮で寝ている炎魔の方が異常だ。
「・・・私はネクロマンサー機関にここへ派遣された天草あまくさ空そら。これからよろしくおねがいます、鬼崎君。」

ネクロマンサーとは何かと聞こうとしたら隣にアテネが現れた。

「はい、自己紹介終わり。これから会議するから、エル、アレお願い。」

「アレって？」炎魔は聞くが先にテュラエルが立ち上がり、炎魔の前に立った。

「これです。」そういうとフラッシュのように辺りが眩い光に包まれた。

数秒後、光が収まり、周りが見えてきた。

アテネは満腹したような勝ち誇った顔で、先ほど天草が着ていた黒いマントと天草が着ていたと思われる服が彼女の腕に収まっていた。そして天草は腕に抱えていた制服を着せられていた。少し顔が赤くなつて、涙目だ。

「奥義、女神の一閃着替え術。」とアテネは宣言する。

「だせえ！！」炎魔は突っ込む。

「新しいメンバー三人加えたところで会議を始めたいと思います。」
全員で真ん中にあるテーブルに腰掛け、会議が始まった。

「まず全員、自己紹介とコードネーム（笑）をおねがいます。ではこの私から。」

話をグイグイ、マイペースに進めていくアテネ。

「私は雷神 アテネ、一年C組で生徒会長の座を見事に奪いました。」

趣味は女の子の体とプロデュース、そして野望は世界征服。コードネームは「姫」、もしくは「女神」でもいいわよ。ちなみに鬼崎くんは馬鹿だから特別に「ヒメツチ」って呼ばせてあげる。生徒会であなたたちをこき使うからよろしく？じゃ、あとは時計回りで紹介。」

「どんな自己紹介だ?!色んな意味で危ない要素の塊じゃねえか!大体、何で俺がけなされてるんだ?!」

「では次は私だ。」

「あれ?俺無視ですか!?!」

炎魔の突っ込みは空しく響き、優は自己紹介を始めた。

「私の名前は土方 優、16歳。一年A組の委員長と風紀委員長を任せてもらっている。私の家は道場で代々「桜斬琉」を告いでいる。上にお兄様が一人。そして私は「アームズ魔術」を駆使している。」

「アームズ魔術、って何?」と炎魔は質問を挟む。

「マナで武器を形作り、好きな時に召喚する魔術です。」隣に座っているテュラエルは説明する。

「男嫌い、と呼ばれているが私は男としか戦わないから、そう呼ばれているだけだ。呼び名は気にしていないから好きに呼べ、そのウジムシ以外はな。」

そう言うと優は炎魔を睨んだ。

「おい、何で俺だけこんな扱い?グレルぞ?」

「まあ、わ、私と毎朝六時に稽古の相手になっってくれるんだったら、「土方様」と呼ばせてやらんでもないぞ。」

土方の顔が少し赤くなる。

その反応を見たアテネは、新しいおもちゃを見つけた子供のように目を輝かせ、ニヤニヤし始める。

「わーったよ。」

炎魔は頭を掻く。

「その代わりに毎朝起こせや。」

「いいだろう。」と土方は少し嬉しそうに同意する。

「じゃあ、次はアタシだな！」

光は元気良く自己紹介を始める。

「学園一の暴れん嬢とはこのアタシ、鳳凰光様だ！趣味はスポーツ全部だ！最近バンジージャンプにはまってるぜ。生徒会では生徒会新聞をやってやってるぜ。炎の魔術、だけしか使えないけど少し興奮し始めると周りが熱くなり始めるから少し気をつけた方がいいかな？アタシのことは、光、って呼んでいいぜ。」

「やっとな普通の自己紹介か、なんかバンジーが聞こえたような気がするがほつとこう。」

「夢は不老不死の仙人になることだぜ！！」

炎魔のコメントが気に入らなかつたのか、ニヤリと笑いながら余計な夢を付け加える。

「私は雪白鈴奈と言います。」と雪白は少し恥ずかしそうに自己紹介を始める。

「皆さんと同じくこの学園の一年生で、生徒会長さんと鬼崎君と同じクラスに所属しています。一応、保険員んですけど知らない内に生徒会に入ってしまった。水系の魔術を使うけど、癒し系も使えるので皆さんが何か怪我でもしたら私に言ってください。」

今の自己紹介はつつかえずに終えたが、あまりにも恥ずかしそうに言う姿は男のハートをえぐるものがあつた・・・

「きゃあああ、可愛い！！」

しかし感激したのは女のアテネと光だつた。

「もうこの恥じらいがたまらないわ！！カメラよ、今すぐカメラを持ってきなさい！！！」

「よし、ちよつと待ってる！今すぐ救急車を呼んで、お前らを精神病院に叩き込んでやる！！」と炎魔は疲れたように突っ込む。

・・・充電中・・・

「では、自己紹介を続けたいと思います。」
光は黒こげになっていている炎魔がない様に天草空に自己紹介を振った。

「・・・天草空です。ネクロマンサー機関からこの学園に派遣されて、皆さんとは転校生という形で会うことになりました。よろしくお願ひします。」

「ネクロマンサーって何？」
焦げている炎魔は手を上げて聞く。

「死と死人に関係する魔術を扱う人たちと言われていました。」
テュラエルは説明する。

「どうやらこの中で一番の物知りらしい。」

「彼らの事は謎に包まれていて、運良く会うことが出来たとしても自分たちの事は絶対に語りません。それに色々な特権を持っているので情報操作などしている可能性があるとも言われています。まあ、死に関する人たちですので一般の人はあまり関わりたくない傾向があるようです。」

「なるほどね。」

どんな掟があるとはいえ、人から避けられてばかりでは孤独感に浸りやすくなってしまふ。

だからこそ、炎魔の対等な扱いが少し嬉しかったのだろう。

そして自己紹介もこれで足りるし、誰も余計な質問をしなかった。

「では次は僕、テュラエル・エンジェルダストです。皆さんと同じく龍牙魔術学園、一年生です。趣味はローション・・・」

・・・充電中・・・

「切りよく、エルが終わってくれたから、最後に鬼崎クンの自己紹介に移ろうかしら。」

部屋に雷柱を二本くらい立て、男二人を黒焦げにした張本人は何事

も無かったように炎魔に自己紹介を振った。

「俺は鬼崎炎魔、多分16歳。戸籍問題でこの学園には転入してきた。そしていきなりそのヒメツチに生徒会に入れられてしまった。まあ、学園の連中になんか目え付けられっちまったし、とりあえず生徒会にいることにした。ちなみにニツクネームは認めん!!!」

「はい、良くなりました。」アテネは拍手する。

「俺は子供か?!」

「では、龍牙魔術学園生徒会役員は全員集まりましたー!」

(一同、拍手)

「これで正式に私の生徒会が学園側からも文句なしに認められることが出来ました。明日からは『龍牙体育武道隊』の準備を始めるから皆、明日の放課後、ここに来るように・・・」

「ちよつと待て、何でココ?」

この部屋は狭い、そして何より炎魔と空の部屋だ。

「生徒会室は光が興奮して使えなくなりました。」とアテネは口を尖らせる。

光はテヘッと舌を出した。

生徒会室で何やってたんだ、こいつ!!!!!!

自己紹介で人の事ってわかるの？（後書き）

次回は自己紹介をします。

人物紹介（前書き）

皆さんこんにちは、ドイツの狛犬です。

前にも要望があったので、人物紹介いきたいと思います。

そのままだとつまらないと思ったので他のキャラのコメントを付け加えておきました。

人物紹介

龍牙魔術学園生徒

鬼崎 炎魔 おにびきえんま 16歳(?) 一年B組 生徒会雑用係

一見ただの凡人。可もなく不可もなく何処にでもいそうな男。ただ目付きが悪い上に目が紅く、ツンツンの白髪なのが特徴。それゆえに不良と間違われることが多い。性格はいい加減で失礼な発言することもしばしばあるがお人よしである。

学園に来る前には修行として三年間、大自然の中に放り込まれたため、常識がなっていない。

闇の力を扱っているが、一体何なのかまだよく分からないため、あまり使わない。

だが闇の力が結晶化したした大剣、ダークネスを好んでよく使っている。

接近戦は得意だが遠距離は絶望的に下手。ダーツで一メートルだけ離れていても絶対に的に当たらない。

身体能力は体に似合わず強靱で現役兵隊すら凌ぐ、そして再生能力が普通の人間の十倍もある。

ちなみに苦手なものはナメクジ。

アテネ・「赤眼、白髪に凄まじい身体能力って誰でも一度は考える主人公設定じゃない。ベタ ね〜。」

土方・「それに自分の力が分からないとは、情けない。」

光・「でも名前がなんかすげー思い切りだ。」

雪白・「ナメクジ、私も苦手……」

空・「……ユニーク。」

テュラエル・「野蛮人にローションの素晴らしさが分かるはずがありません。」

テュラエル・エンジェルダスト（てゆらえる・えんじえるだすと）

16歳 一年A組 生徒会新聞部長&会計

「天使の末裔」と言われている大国アジールの名門家の長男。現在、龍牙魔術学園に留学中にて生徒会書記。金髪パーマに灰色の眼、そしてイケメンなため、女子には人気出そうなのだがローションが趣味のため、かなり引かれている。あとDM。洞察力は鋭く、相手を見ただけで身体能力、性格に職業も言い当てる事が出来る。

根は良い奴だけど皮肉屋。光の魔術をあつかう。

口調はいつも敬語で一人称は「僕」。

炎魔・「お前、DMだったのか……」

アテネ・「以外に役に立つのよ？」

土方・「（ぶった切ってしまいたい!）」

光・「光の魔術って何が出来るんだ？」

雪白・「肌に塗るだけならいいけど・・・」

空・「…悩みでも、あるの？」

土方 優（ひじかた ゆう） 16歳 一年C組 生徒
会風紀委員長

‘男粉碎の優’と異名をとる龍牙魔術学園の唯一の風紀員。流れるようなしなやか黒いロングヘアに凜とした雰囲気をもつ美少女。強い意志が籠もった瞳が特徴的。

胸がそこそこあるが実はサラシを巻いているために小さく見えるだけ。

‘桜斬流剣術’（おうざんりゆうけんじゅつ）を受け継ぐ土方家の長女、上には兄が一人いるが剣の道より教師の道を選んだため、彼女がその流派を受け継ぐことになる。

小さいころにとても仲が良かった男の子に裏切られ、異性を忌み嫌うようになり、今の異名をつけられてしまった。

小さいころから真っ直ぐな性格で曲がったものが嫌いで、自分が正しいと思ったことは必ずやる。そのため少し周りに目が行かなくなり、勝手に突っ走ることもしばしば。

がたまに素直じゃない面もある。
アームズ魔術を扱う。

炎魔・「コレは雌じゃない、手足が生えた大砲だ。けど嫌いじゃね

え。」

アテネ・「この子、最高！！抱き枕にしたいぐらいだわ。」

光・「アタシの親友だぜ！」

雪白・「尊敬できる、素晴らしい女性だと思います。」

空・「…ツンデレ？」

テュラエル・「彼女の裏拳は最高です（ハアハア）。」

？

雷神 アテネ （らいしん あてね） 16歳 一年B組

生徒会長

世界的企業イカズチカンパニーの一人娘。少し癖がある金髪ポニーテールでスタイル抜群なので学園のマドンナ。しかも右目が海のように蒼く、左目がエメラルドの如く輝いている。

成績トップ、スポーツ万能、魔術は大人を凌駕するほどの実力。

相当な自信家で、姫と呼ばれること望んでいる。そのためかわがままで横暴で人の話を聴かない。それに目的のためならせこい手を使う。

一年で前任の生徒会長を蹴落とし（第十九章）、のし上がった少し怖いお方でもある。

父親は大抵外国にいるため殆んどあったことは無い、そして母親はアテネを生んで亡くなってしまった。そのためかすこし寂しがりやの面があるかもしれない。

炎魔・「お前の設定も結構ベタじゃん。」

土方・「周りくどいやり方は気に食わん、が男には絶対に引けを取らない姿勢は大したものだ。」

光・「この人といると楽しいぜ!!」

雪白・「あうう、恥ずかしい思い出が・・・(orz)」

空・「…強い子。」

テュラエル・「そういえば、同じ金髪ですね。」

雪白 鈴奈 (ゆきしろ れいな) 16歳 一年B組

生徒会書記

炎魔とアテネのクラスメート。オサゲの地味子だったがアテネのプロデュースで横に髪を縛り、ハーファップの美少女になってしまった。髪と眼の色は染めていないにもかかわらず青い。本来なら髪を染めることは校則では制限されているが彼女の蒼い髪は地毛なので学園側もどうしようも出来ない。まだ謎に包まれている少女。

水の魔術を扱い、傷を治すヒーリング魔術をつかえる。だから保健員なのだがアテネが生徒会長になり、クラス委員長の義務を放棄しているとき(約九十九パーセント)にクラス委員長代理としてその義務を果たさなければいけない羽目に・・・

炎魔に虐められているところを助けられ、友達関係になっていく。

炎魔・「猫ミミ、合っんじゃね？」

アテネ・「私の自信作よ!!!」

土方・「もつと自信を持って、そうすれば強くなれる。」

光・「火消し役、頼むぜ!!!」

空・「…大丈夫、恥じる事、無いよ。」

テュラエル・「お互い苦労人、がんばりましょう。」

鳳凰 光 (ほうおう ひかり) 15歳 一年C組

生徒会庶務

土方優の親友で鳳凰家という名家の長女。下には到底なシスコンの弟がいる。燃えるような紅いセミロングの髪にカチューシャをつけているスポーツ少女。

少し天然気味で男の子っぽい性格している。竹をさばいたような性格で心優しい少女。

鳳凰家は火の鳥の子孫と言われ、`炎の加護`を受けている。そのため火によるダメージは一切無い。

何時も元気いっぱいだがドジを踏むことも多い。炎魔に飽きられている。

炎魔・「ふっ、伝染しそうなくらい明るいぜ。」

アテネ・「いいお尻？」

土方・「私の数少ない親友だ。」

雪白・「私も、ああいう風になれるかな？」

空・「…元気いっぱい、健気。」

テュラエル・「輝きなら負けません。」

天草 空（あまくさ そら） 16歳（？） 一年B組

副生徒会長

炎魔の後に転校してきた謎の美少女。炎魔と同じ白い髪と紅い眼をしている。長い髪をハーフアップにしている。彼女はネクロマンサーであり、死者と交わる力を備えている。

江戸でゾンビが現れるという噂を聞きつけネクロマンサーの機関から送られてきた、そしてそこで炎魔の噂を聞きつけ、彼をゾンビ事件の黒幕と勘違いする。

が誤解は解けたものの、同じ髪色と紅い眼の炎魔が気になる。

性格は穏やかでお嬢様タイプ。そしてネクロマンサーの誇りを何よりも重んじている。

炎魔・「俺と一緒にの部屋を嫌がらないから良い奴、だと思つな。」

アテネ・「ムフフ、いい素材だわ。」

土方・「真面目そうない子だ。」

光・「もつと楽しそうにしようぜ！」

雪白・「と、とても、い、い、いい子だとお、思います。」

テュラエル・「お嬢さん、僕と一緒にお茶でも飲みませんか？」

人物紹介（後書き）

え、気づいたと思いますが、ちょっと本編との設定がずれています。

本編の方を書き換えますので、勘弁してくださいm（）m（）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0849o/>

闇の力ってナニ？

2011年7月23日00時50分発行